宮崎医大整形外科

同門会誌

第　8　号

平成8年12月

宮崎医科大学整形外科学教室同門会

宮崎医科大学整形外科学教室同門会総会　平成7年11月25日　於 宮崎観光ホテル

宮崎医科大学整形外科学教室新入医局員歓迎会　平成8年6月1日　於　ホテルプラザ宮崎

目　　次

巻　頭　言……教授　田島　直也…1
ご　挨　拶……会長　河野　雅行…2
会員寄稿
随筆
人間開院80年の心境……玉井　達二…3
懐古趣味……木村　千例…4
顔写真……尾田　博…5
同窓会……平部　久彬…6
土いじり考……中村　誠司…7
私はこうしてうつ病になった……福田　健二…9
遊び……三股　恒夫…12
自然と遊ぶ……黒木　俊政…13
医局長雑感……帖佐　悦男…14
SIROTに参加して……鳥取部光司…15
1996年　夏……樋口　潤一…17
特別寄稿（留学生）
MY HOPE……AHSAN RASHEDUL…19
特集1　第39回西日本整形外科親善野球大会
17年目の初優勝……田島　直也…21
1軍優勝観戦記……岡田　光司…23
第39回西日本親善野球大会報告……川越　正一…24
1軍初優勝おめでとう・ありがとう……松元　征徳…25
2軍2連覇なる……園田　典生…26
特集2　日本側弯症学会
第30回日本側弯症学会を終えて(1)……田島　直也…28
第30回日本側弯症学会を終えて(2)……帖佐　悦男…30
第30回日本側弯症学会を終えて(3)……久保紳一郎…31
第30回日本側弯症学会を終えて(4)……作　良彦…32
Marc Ashen先生にお付きして……黒木　浩史…34
Winter先生と……松元　征徳…35
Heart to Heart……渡部　正一…36

特集３　開業○周年を迎えて
近況報告……山口　政仁…37
開業11年目を迎えて……菊田　　勇…39
「寅さん」のごとく―開院５周年を迎えて―　……川野啓一郎…40
特集４　結婚
結婚してみて……松岡　知己…41
狭い部屋もいいもんだ……濱田　浩明…42
新入会員紹介
心の中にあるもの……川越　　修…43
還暦に想う……後藤　一成…44
自己紹介……前原　東洋…46
施設紹介
八田病院……八田　純雄…47
宮崎県立日南病院整形外科……長鶴　義隆…48
国立療養所宮崎病院……桑原　　茂…49
国立都城病院……税所幸一郎…50
三股町立国民健康保険病院……田代　宏一…51
宮崎市郡医師会病院……黒田　　宏…52
済生会日向病院……川添　浩史…53
新入医局員紹介……54
教室同門の研究業績……59
同門会員名簿……78
編集後記……98

巻　　頭　　言

田　島　直　也

今年は社会的にはO－157中毒事件や薬害エイズ事件があったが、あと残すところ３ヶ月あまりとなった。

今年を振り返ってみると、教室としてはまず９人の新入局員があった。宮崎医大では、毎年本学に残る人が50％以下であり、これだけの入局員がいたのは医局長、医局員のお陰である。御苦労様でした。

次いで、８月に宮崎で開催された第39回西日本整形外科親善野球大会で１・２軍とも優勝できたことは、教室にとって特記すべきことである。昭和55年“Sun and Green”のティームを結成してから実に17年目の初優勝であった。初めは、医局員の「和」を目的として参加することに意義があったが、次第に優勝を目標にして、ついにここに目標達成ができた。今まで野球に御協力戴いた同門会・教室の皆様に改めて御礼申し上げます。

さて、来る11月には、第30回日本側弯症学会を、再来年には第25回日本臨床バイオメカニクス学会、第６回日本腰痛研究会を開催予定であり、同門会の皆様にはまたいろいろと御協力・御支援をお願いすることになりますが宜しくお願いします。

学会開催は教室にとっては研究発表の場であり、宮崎をアッピールする機会である。そのためには、しっかりしたリサーチが必要である。しかし、現代の医科学生は社会人や他大学からの転向組もあり、種々の目的で入学してきている。整形外科学教室員に対して、毎年アンケート・面接を行い、将来の希望・目標を聞きリサーチ希望者には研究の機会を持ってもらうようにしているが、せっかくリサーチに取りかかっても、目標達成迄いかない人がいるのは実に残念である。今は社会情勢も変わり、仕事中心から種々の目的、家庭を大切にという傾向にあるが、いったん決めたらぜひ最後までやり遂げてもらいたいものである。一生に一度でいいから一つの事をやり遂げる事は、それなりに意義がある事ではないだろうか。時間がかかってもよいから、ぜひやり遂げてもらいたいと思っている。

とにかく、５年、３年、１年先の目標をしっかり立て、一歩一歩確実に目標を成してもらいたい。かくいう私も、この１年を振り返り、また、新たな希望で１年１年頑張っていきたいと念願している。

（9月記）

ご　　挨　　拶

河　野　雅　行

皆様お元気でご活躍のこととお喜び申しあげます。

今年も国内外共に社会情勢は相変わらず賑やかでした。事件が起これば天地がひっくりかえり、この世の終わりででもあるかの様なマスコミの報道に振り回され、自分だけがとり残されるような不安感にとらわれますが、結果的には何の変化も無いことが多々ありました。最近大事件に慣れたせいか喜怒哀楽をあまり感じなくなったようです。なんとなく日々が経過し、なんとなく歳を取ってゆく感じがしてなりません。それでも明日こそは気分を新たにしてより良くしようという向上心は失いたくないものだと思っております。

さて教室をめぐるトピックスとしまして野球大会優勝の快挙がありました。永年の悲願とでも申しましょうか、田島教授をはじめ選手、教室員の皆様方ご苦労様でした。次回からは追われる立場となります。勝ち負けは時の運とは申しますが、野球に関しましては練習のみが栄光を掴む唯一の方法と思われます。

練習にもますます熱が入ることでしょうが怪我をしないように頑張ってください。本年はオリンピックの年でもあり最近のスポーツブームからも世間のスポーツに対する関心も高くなっております。しかしながらオリンピック競技を観ましても、選手が頑張っている割には成績に結びつかないようです。

選手の資質、監督・コーチの能力、競技団体の在り方等々問題は単純ではありませんが、メディカルサポートの面だけを他国と比べてみましても我が国のシステム自体が遅れているような印象をうけました。スポーツ医学は教室のテーマの一つでもありますし、整形外科はスポーツとの関わりの多い分野です。身近な機会をとらえてもっと積極的にスポーツ現場に参加することが医療の面からのスポーツサポートとして必要ではないかと思われます。

いくつかの学会・研究会が教室主催の元に続いております。夫々担当の先生方をはじめ教室の先生方にとりましては大変なご苦労とは存じますがしっかりお願いいたします。私達同門会員は直接お手伝いは出来ませんが、会員の皆様は出来るだけ全学会に出席していただきますようお願いいたします。

本年もまた多数のご入会がありました。新入局者９名　新入賛助会員３名の先生方です。未だ数少ない会員の中で大きな戦力となられることを期待しております。同門会への御協力をよろしくお願いいたします。

皆様方のますますの御活躍をお祈りいたします。

人間開院80年の心境

玉　井　達　二

人間を開業させて頂いてから、何時の間にか80年の歳月が過ぎ、私の人生もいよいよ入舞いの時を迎えました。

私の人間稼業をふりかえりますと、都合の良いことは他の思い出を押し退けても顔を出します。その一方で、反省しなければならないような思い出は片隅に押しやられ、仮に姿が見えても素知らぬ顔でやり過ごされたり、つまらぬ理屈をつけられては都合の良い形にされたり、気に入った色に染め変えられたりされています。全くあきれた話です。

これでは全く進歩はなく『お前は本当に馬鹿だな。この80年間馬齢を重ねて来ただけじゃないか』と言われても致し方ないと、我ながら情けなさに頭を抱える今日この頃です。

世の中では『人間は万物の霊長』などと言いますが、もし私がそんなことを言ったら、それこそおこがましい話だと思っています。そのためでしょうか、この頃は新聞に掲載される動物のよい写真や記事が目にとまり、反省させられています。

誰もいない建物のエレベーターに、15日間も閉じこめられたのち発見され、10匹の子犬たちと再会して喜んでいる幸せそうなお母さん犬のジェニーの写真。

見ているうちに自然に顔が綻びました。

こんな話もありました。

森に迷い込んだダウン症候群の10才の子供が、零下17度の夜の寒さの中で、2匹の野犬に体を温められるなどして、3日ぶりに無事救出されたという。そして1匹の犬は子供を乗せた救急車を追い掛け、病院に到着すると、安心したかのように立ち去ったという話。何かしら胸が一杯になりました。

もう一つ聞いて下さい。

アメリカの動物園で、ゴリラをよく見ようと柵を攀登った男の子が、5m下の檻のコンクリートの床におちて怪我をした。それを見た自分の子をおんぶしていたお母さんゴリラがかけより、けがをした男の子を抱え上げて、腕の中であやすようにしながら、飼育係の出入口まで運んだ。このお陰で係員が子供を救出することが出来た。

そのゴリラは以前人間と一緒に暮らした事があるとか。それはゴリラにとって、きっと楽しい、よい思い出だったのでしょう。

心の温まる話でした。

「それで今の心境は？」と問われれば、『私の余命も幾許もなくなりましたが、今まで皆さんから頂いたご厚情を大切に、またこれからも皆さんと共に良い思い出を重ね、それを心の糧として、今より少しでもましな人間として人生を締め括りたいと願っています』というところです。どうぞ宜しく。

懐古趣味

木村千仞

趣味といわれるものは多種多様で、プロ顔負けの特技から、趣味とはいえない類のものまである。昭和ヒトケタ生まれの戦中派は時代的背景もあり、私ごとき無趣味な男も結構多く、余り恥ずかしいとも思わず楽しかるべきストレス解消法も知らず酔生夢死の道を辿っている様である。

夏の間は東北で宮沢賢治関連のイベントが旺んと思っていたら、10月に入ったとたん熊本では夏目漱石来熊100年とかで漱石博なる催しが1ヶ月間各所に分散して多彩に行われている。そのオープニングセレモニーが10月6日に黒髪町の旧五高赤壁本館中心に開催され、かつてのＯＢも数十名かり出されたが、久方振りの学舎内に漱石ゆかりの記念のものが並べられて学生時代を彷彿とさせた。四国松山から熊本へ赴任したのが100年前（明治29年3月）で、“名月や十三円の家に住み”と詠み東京の友人への手紙に俺は日本一高い家賃の借家に住んでいると書いている。明治40年頃の煙草20本入りが15銭だったから今なら20万円余の家賃となろうが教授の給料（100円）からみると確かに安くはない。それでも在熊時代の写真をみると夫婦と書生1人、お手伝い1人を雇っていた様で、日清戦争後とはいえ、佳き時代だったのかもしれない。在熊4年3ヶ月の間に「草枕」、「二百十日」、「三四郎」、「道草」、「虞美人草」をはじめ「吾輩は猫である」、「坊ちゃん」の中にも熊本体験がにじまれる。又、2000句余の俳句の半分は熊本での作で地元紙連載の一部を読んでも洒落や風刺の多い作に驚かされたし、県内外をあちこち歩き回ってスケッチされた絵の中の「わが墓」は、草枕の舞台となった小天ミカン山から有明海をはさんで雲仙を望んだ日当たりの良い場所である。先達の五高ＯＢの集まりで呼び出され、かつての白線帽に校章入りの法被を着て寮歌とストーム、陸ボートに45年ぶりに参加したら1週間位腰痛がとれず、とんだ年寄りの冷や水であったと反省している。家内から懐古趣味だと笑われたが、これも趣味の一つだろうか。

そういえば停年過ぎてから小学校、中学、高等学校、大学、同門、同窓会とやたら懐古的集会が多く、診療のかたわら出席するには研修会との重なりがあり、半分は欠礼する始末である。しかし、病欠でないのがせめてもの慰めと考え懐古趣味といわれ乍らもひとり喜びにひたっている。

欧米人は概して、老人になっても自ら老いを認めずいつまでも若者ぶっているが、ヘッセは「老人として自分の目的を果たし使命に恥じない行為をする為には、すなおに老令を肯定せよ」と言っている。懐古趣味は東洋的なものであろうか。

顔　写　真

尾　田　　博

「同門会誌名簿用の顔写真を送って下さい。」と云われて、私はハタと困りました。

手頃な写真が無くて、スピード写真では人相が悪くなるからです。

写真館で撮ったのもありましたが、期待外れで落ち込んだものばかりです。

自分の嫌な所が目立ったからでしょう。

しかし、毎日鏡を見ていて、自分のよい所が見えてきません。それどころかこの頃は死んだ親父に段々似てきたようです。

私が４才のとき写したスキー服の写真が可愛かったので、大人になってもよい写真が撮れるだろうと思っていたのですが、不発でした。

この先は弔い用の写真にも困りそうです。

それでも先頃の写真をやっと一枚見つけたので送ります。

内輪では、この写真は若そ過ぎてサギっぽいとも云われましたが、私はこれは詐欺ではないと思いたいのです。

私が大学の医局に入ったのはもう40年も前ですが、その同窓会名簿には30年ほど前の写真がそのまま載っています。そして、他の人の写真もそのままです。

それに較べたらこの写真は本物だと思います。

たかが写真一枚、凡そ正確であればよいのでしょうが、ただ、皆様にお会いしたときに判るかどうか、それが一寸心配です。

皆様の賢察を仰ぎつつ、今後とも何分宜しくお願い致します。

同　窓　会

平　部　久　彬

数年前、卒後約30年たって、小学校５、６年生の同窓会をしてみようと思ったことがある。その小学校は、当時も宮崎市の中心街より遠くない所にあった。クラス全員の名簿が必要となったので、小学校近くの同級生に電話すると、コピーが手に入った。日頃から声をかけ合っている数人の友を基点として、連絡し合ったが、総数57名（男子30名、女子27名）中、住所か電話が判明したのは、男子18名、女子14名で、県内居住者は男子14名、女子８名であった。印象としては、あまりにも連絡が取れないこと、男子の県内居住者が少なくないことでした。５年、６年で担任が代わったので、厳しかった５年の女性担任、恐かった６年の男性担任を招いた。皆が知っている学校近くの中華料理店で開くことになった。雰囲気が盛り上がった頃、各々の近況報告となった。その時、楽しそうに旧友と話し、順番待ちしていた女子が、立ち上がるなり、号泣し女性担任に向かい、「先生、真に有り難うございました。御陰様で今の私があります。」と一息に言った。そして何か胸の痞えが取れたような様子でした。担任は、「本当によかったねー。……」と仰いました。人生、山あり谷ありと言われますが、彼女は小学校時代に、特に谷があり、それを女性担任と出会ったために解決できた様でした。次に二次会となり、両担任はじめ皆で、楽しく飲み、話し、歌ってお開きとなりました。私も最後に挨拶をと思い、気持ちよさそうに酔っておられる男性担任の傍らに行きました。小学校時代のいろいろな話になったのですが、突然「おまえは、何しちょっとか!!」と拳骨が一発私の頭にとんできました。こんなに長い年月が経っていても、私のことを見透かされるのだなあーと思い、周囲の同級生のことも忘れ、心恥ずかしかった。師は、いつまでも師であり、教え子のことがよくわかり、頑張れよと励まして下さったのだと思っています。残念ながら、御恩は御返しできそうもないですが、同窓会はもう一度位開催したい。

「土いじり考」

宮崎医大整形外科　中　村　誠　司

昨年の暮れ頃から、我が家の猫の額ほどの狭い庭を耕し、菜園作りを始めた。小石を拾い、雑草を根から取り除き、小型の手押し式耕耘機を動かし、鍬を振るい、少しずつ少しずつ土を作ってきた。長年放置され、荒れ放題だった庭を畑に変えるのだから、大変な労作業である。しかしながら、いきなり種を蒔いても、結果は見えているため、まずは土つくりと決めて、週末ごとに時間を見つけては、土と格闘した。時には、隣の畑の住人から土のおこしかたやら肥料の入れかたやらを教えてもらいながら、どうにかこうにか庭の一角に畑らしい空間をこしらえた。

年を越し、今年の春に畝を作り、いろんな野菜の種を蒔いた。ジャガイモ、オクラ、ナス、ピーマン、ネギ、ミニトマト、ニガウリそしてスウィートコーン等々である。素人の欲張りというか、いろんな野菜を植えてみたかった。種を蒔いてからは、毎朝出勤の前に畑を見に行き、まだ芽は出ていないか、まだかまだかと、遠足前のこどものような気分でうきうきしていた。

週末には、軍手をしつつ、麦わら帽子をかむって、畝のまわりに生えた雑草をせっせと引き抜いた。土をいじっているその瞬間は、自然という時間と空間のなかに溶け込むような気だるい錯覚を覚えたものだ。土の中にはそれこそ天文学的な数の微生物が生きていて、いま自分は彼らと同じ次元で呼吸をしているという、彼らも自分と同じいきものであるという感覚は、とても新鮮であった。

梅雨の前に芽を出した野菜たちは、適度の雨と温かい陽光を受け、すくすくと成長していった。そんな彼らに出勤前のごく僅かの時間はなしかけるのが日課になった。喋ったところで、一方通行の会話にしかならないが、そんなことは承知のうえで、なにかしら話さずにはおれない衝動を感じた。「ピーマン君は伸びがいいのに、隣のオクラさんはまだ芽が出ないね。」「向かいのスウィートコーン君は、背がよく伸びてるがなかなか太くならないが、ミニトマトさん知ってる？」等々。知らないひとが見たら、気が変になったのではと思われたかもしれません。

梅雨も終わり、若葉の木漏れ陽の下で、今年最初のジャガイモの収穫をした。こどもたちも手伝っての土のなかの宝探しに、大はしゃぎ。お友達や近所におすそ分けできるほどの収穫を得た。早速その日の夕ごはんは、新ジャガ入りのカレーライス。なんとも格別の味がした。ひとは、生きていくためには、ほかの生き物たちの生命を戴かなくてはならない。しかし、仏教では、「不殺生」を説く。相矛盾するこの命題にたいして、お釈迦様は、仏典のなかで、「殺すこころを殺せばよい。」と達観なされた。私たち人間が生きていくためには、どうしても他の生物を殺さなくてはならない。しかしながら、それは命から命への継承でなくてはならない。生きていく必要最小限の殺生は、次の生命に繋がってこそ失われた死の意味をもつのである。宮沢賢治の詩にあるように、ひとは、「一日玄米四合と味噌と少々の野菜」で充分なのかもしれない。新ジャガ入りの自家製カレーを食べな

がらそんな思いになった。

夏真っ盛りの頃、我が家の素人菜園もいろんな野菜たちで賑やかになった。ちぎりたてのミニトマトの味はとても新鮮で美味しく、ネギは料理の薬味に使えるしで、なんとも贅沢な毎日であった。たった一つだけうまく実をつけなかったのが、スウィートコーンであった。背の伸びもわるく、実入りも疎らであった。隣の畑の住人に相談したら、肥料の与え方に問題があったとの由。教科書だけでは作物は育たないことを思い知った。同時に、野菜それぞれに、土の作り方、種の植え方、植える時期、肥料や水の与え方等々が違うことも知った。通り一変のやり方では、失敗してしまう。農業関係の何かの本に、土を知り作物と会話できなくては、一人前の百姓とはいえないとあったことを思い出した。学者では作物は作れないことも解った。長年の経験と現場から得た知恵こそが、最良の肥料とはいえまいか。土作りも人作りもどこか相通じるところがあることを、土をいじりながら考えた。

私はこうしてうつ病になった

福　田　健　二

私は都城の秋が好きだ。盆地のため、朝晩の冷え込みは厳しいが、晴れ渡った空のかなたにくっきりと霧島山が見渡せる日などは、気が引き締まる思いがする。この秋は私が当病院に赴任して三回目の秋となる。

最近は、仕事も順調で忙しい日々を送っている。赴任当時に比べて、外来者数は、3倍近くに増え、手術件数、病棟の売り上げも順調に伸びている。

外から見ると、順風満帆の様に見えるが、実は、私はここ数カ月の間、うつ病であった。あったと過去形にしたのは、現在その状態から脱しつつあるからである。それまでは、こうして寄稿の文章が書けること自体信じられない状況であった。うつ病の正確な定義は知らないが、自分で分析すると、少なくともうつ状態であったことは間違いない。ざっと症状をあげると、

- 朝目覚めが悪い。
- すっきりしない。
- 頚、肩が凝る。
- 食欲がない。（食事のことを考えたり、外食をするのもおっくうであった。）
- 新聞を含め活字を読む気がしない。（物の本によると、政治、経済欄が読めなくなり、スポーツ欄でも見出ししか目に入らなくなったら要注意だそうだ。）
- スポーツをしない。（好きだったゴルフの練習を一切しなくなった。毎朝の散歩も週1回のテニス同好会にも参加しなくなった。）
- 外来、病棟、手術と仕事はこなすが、それ以外で人と話をしたり、接触することが極端におっくうになる。（MR、メーカーさんごめんなさい）
- 書類が書けない。（書くどころか見るのも嫌で、外来には山のように書類がたまり、整理に困った事務所の女の子が段ボールを用意した。）

これだけ挙げれば、少なくともうつ状態であったことがおわかりいただけるだろう。外来では患者さんに「先生大変ですね。」「身体こわさないで下さいね。」と言われ、ナースには「先生かわいそう。」と言われていたので、外から見ても判るぐらい元気がなかったのかもしれない。

では、なぜここまでになったのか。

大きく2つの理由があったと思う。1つは不合理な忙しさである。2つ目は単身赴任である。単身赴任から話を始めよう。都城に赴任したときは家族と一緒だったが、今年の3月から単身赴任をしている。これは話せば長くなるが、長男の小学校入学が関係している。通勤しても片道1時間余りだが、往復2時間半になると時間がもったいない。疲れて帰って、事故でもあったら大変だ。術後や重症者をかかえた時の対応が不安だ。等の理由で単身赴任を選んだ。はじめの1ヶ月位は、一人暮らしの気楽さや、時間を自分のためにたっぷり使える楽しさでルンルンだった。ところが、一度餌づけをされ飼い慣らされた野生動物が、もはや野生には戻れないように、一度家庭の味を知っ

てしまうと、男は独身時代のように勝手気ままに暮らすことができなくなってしまうようだ。少しは腕に覚えのある料理もすぐにレパートリーが尽き、いきおい外食をすることになった。中年男が、一人で食事をするのは、何とも空しいものだが、うつ状態が進行すると、食事に出掛けることすらおっくうになった。おまけに家に帰って話し相手がいないというのは、何とも寂しく、その日のストレスをため込んでいく基となった。

この単身赴任がうつ病の引き金の一つであったことは否めないが、直接の原因ではない。それ以前から、私の中でくすぶっていた、やり場のない不満、解決できない矛盾が、まるでボクシングのボディーブローのように、自分が気づかないうちに少しづつ精神と肉体を痛めつけていて、私はいつ病気になってもおかしくない状態であったと思う。その大きな原因は不合理な忙しさである。

患者さんが増えることは、医師として本当に有り難いし、喜ばしいことではある。現在、手術のない日は、朝から晩まで外来をしている。下手をすると食事もそこそこに1日9時間外来に座っていることもある。手術日でも、夕方終わるともう患者さんが外来で待っている。単に数だけを言えば、開業の先生や他の病院の先生の方がたくさん診ているに違いない。忙しいと言えば、どの病院だって忙しいに違いない。問題は中味である。

当病院はその規模、ベッド数からも都城地区の基幹病院の一つであることは間違いない。『総合病院だから』という理由で、周辺地域からいろいろな患者さんが紹介されてくる。しかしである、当病院は精神科（ベッドの大半を精神科が占めている）、外科、整形外科、脳外科、皮膚科、歯科、麻酔科と外科系の病院であり、決して『総合病院』ではない。隣接地に、藤元早鈴病院があり、ここは、内科、産婦人科、耳鼻科、泌尿器科、放射線科を擁する病院であるが、2つの病院は全く独立した存在であり、経営形態も、職員も全く別物である。医師同士の交流も全くないし、何が専門で何をやっているのかもお互い全く知らない。おまけに、当病院には全体の医局がない。当然ながら医局会もないし、会議もない。何か問題点があっても、それを取り上げる場も解決の場もない。各科同士のつながりが希薄で横の連携がうまくいっていない。話を戻そう。内部はどうあれ『総合病院だから』という理由で、重篤な合併症をかかえた患者さんが送られてくる。それは、基幹病院として当然であるし、義務でもある。糖尿病、高血圧、心臓病、肺炎、いろいろな合併症をかかえた患者さんがやってくる。精神病や重篤な脳挫傷、脳出血を伴う患者さんは、精神科、脳外科があるからまだいい。それ以外の合併症はどうするのか。それを誰が診なければならないのか。我々である。整形外科医が診ているのである。たった二人で。

ベッドも外科との混合病棟であるから50床を2つの科で分け合っているが、これがまた難しい。外来が多くなれば、当然入院患者も増える。整形外科はどうしてもリハビリが命であるから、回転も悪い。いきおい、25床を超過して30床前後になる。受け皿になってくれる病院が少ないため、いつも転院先のことで苦慮しており、いろいろな先生方にご迷惑をかけている。いつもいかに退院させるかばかり考えている。外来にしても、根元的な矛盾を感じている。

整形外科とは一体、何を診る科なのか。日整会の中で整形外科という名称が実体にそぐわないという理由で運動器科に変えたらどうかという意見があるが、その賛否は別として、整形外科はその歴史の中であまりにも多くのものを取り込みすぎて、逆にその守備範囲が曖昧になりすぎているのではないだろうか。何でも診るという整形外科医の懐の深さからなのか、外来をしているとにかく、何でもかんでも診ている、いや診させられている様な気がする。それが整形外科医を忙しくしている元ではないだろうか。逆に何でもかんでも

診ないとやっていけないとすれば、整形外科医のもつ専門性、アイデンティティーはどうなるのか。

もう一つ。最近思うことは、各科の専門性の弊害と矛盾である。『総合病院』と言われている当病院の外来を例に取ると、外科は消化器のみ、内科は神経内科のみ、あとは精神科、皮膚科、歯科、脳外科。各科とも専門、専門と金科玉条の様に振りかざすが、専門以外の分野は専門という隠れ蓑に隠れて出てこない。専門以外は何もしない、何もできない専門である。外来のアナムネを読んで、CTを撮って、CTで異常がなければ、患者さんは診ない。患者さんの訴えなんか関係ない。異常なしで終わり。そんな科もある。大学病院の様に各専門家が何人もいて、全分野満遍なくカバーできるところはそれでいいだろう。大学以外ではこれは通用しない。それでは、専門という強固な壁に阻まれた患者さんはどこへ流れていくのか。それは当然の如く守備範囲の広い科へ流れてくるのである。そしてこれは何科へ行きなさい、これはどこどこ病院へ行きなさいと振り分けをしているのである。

ある日、昼食もとれず、外来で忙しくしている時に、ナイフで前腕を切った方が整形へ回ってきた。3時間待ったという。見ると表皮のみの創である。どうして外科や皮膚科の先生へ回して早く縫合してもらわなかったのかとナースに尋ねると、上肢の傷だから整形と思いましたと言う。私は唖然とした。そして、そのナースに外科や皮膚科でも傷ぐらいは縫えるんだよと教えてあげた。

しかし、この不合理な忙しさの中で、私が何とかやってこれたのは、同僚の若い先生方の頑張りのおかげである。吉田（好）先生、尾田先生ともよく仕事をしてくれた。現在一緒にやっている黒沢先生も本当によく働いてくれている。私の足りないところをよく補って、私はずいぶん助けられている。

整形外科医の忙しさや、おかれている環境はどの病院でも大同小異で決して我々の病院が特殊だとは思わないが、1年や2年でローテーションする場合は皆いろいろな矛盾や問題意識を感じていても、もうすぐ異動だからと我慢もできるし目をつぶって知らぬ振りもできる。しかし、私の場合は、長期赴任が決まっていたし、見て見ぬ振りのできない性格が災いした様だ。私のうつ状態は突然やってきたものではない。日々の生活の中でボクシングのボディーブローのようにその時はそうこたえなくても、後になって徐々に効いてきたものだ。

私はこれまで、いろいろな問題を腹に収めることが美徳であり、大人だと思っていた。自分の身にふりかかることは全て「有り難いこと」と思っていた。結局、「有り難い」「有り難い」と念仏の様に唱えて仕事をしていると、いつの間にか自浄できない程のストレスをため込んで、気がついたら、それを発散する行動すら取れない程、疲れてしまうことがあるのに気がついた。人間は本来、適当にバランスをとって生きている。ストレスが溜まると、酒を飲んだり、大声で騒いだり、やけ食いをしたりする。頭にきたら怒る。嫌なことを言われたら言い返す。不愉快なことがあったら人にあたる。そのバランスこそが大切なのだと、やっとこの歳になってわかってきた。うつ状態を脱しつつある今、また頑張る意欲がわいてきている。そして、再確認できた。「一に健康、二に家族、三、四がなくて五に仕事」だと。

遊　　び

三　股　恒　夫

宮医大整形外科教室を退局して、はや3年の歳月が過ぎようとしています。変わったことといえば患者さんの殆どが70才以上のおじいちゃん、おばあちゃんになったこと、手術が極端にへったこと、ゴルフのラウンドが増えたこと等でしょうか。私の場合、仕事の面で報告するようなことは特にありませんので、遊びについて書いてみようと思います。

まずゴルフですが、美々津カントリークラブが車で5分の距離にあるせいかよく行くようになりました。学生時代からやっていましたのでハンディキャップ10までは、わりとスムースになれたのですが、そこからがたいへんで10の壁を破るのに苦労しています。以前はクラブを変えたりすることはほとんどなかったのですが、今ではパットが悪いといってはパターを変え、飛距離がでないといってはボールを変え、それでもだめならドライバーを変えるといったような試行錯誤を繰り返しております。一時期やはり練習が一番かなと気付き、週に3～4回練習場に通ったこともありましたが腰を痛めて挫折、また下半身強化の目的で1日約3㎞のジョギングもやりましたが、春さきに花粉症となりこれも続きませんでした。いろいろと言い訳をしておりますが結局私の飽きっぽい性格が一番の原因のようです。数日前コンペがありラウンドしたのですが、ますます10の壁が厚く高くなったような気がしました。こんな私にもせっせとゴルフ道具を運んできてくれるスポーツ用品店主やラウンドの度に私からチョコレートを奪い取っていく友人達が、シングルになった暁には盛大にお祝いしてやろうと言っておりますので来年をめざして頑張ろうと思っております。

次に、釣りについてですが、耳川河口付近はシーバス（スズキ）、アカメなどの大型魚がいて釣りファン特にルアーをする人達には有名なのだそうです。私も患者さんや友人に勧められ最近ルアーを始めました。釣り場まで数分で行けますので早朝あるいは夕方の暇な時間を利用して楽しんでおります。話では行けば1ｍ前後のシーバスが必ず釣れるようなことを聞いていたのですが、現実はきびしいもので、1日100投前後を目標にやっておりますが、わたしのルアーは毎回一人さびしくもどってきます。しかしながら、早起きと適度な運動ということで健康の面では申し分ないようですのでしばらく続けてみようと思っております。最後に、ゴルフや釣り以外にも家族みんなで楽しめるということで夏場はキャンプによく出かけます。これはテント設営、食事の支度、子供たちとの遊び等と楽しい反面労力としてはたいへんですが家族からの評価は非常にたかいものがあります。今年、わが家から数㎞離れた石並川河畔にキャンプ場ができ、さっそく行ってみましたが、水はきれいでトイレ等も完備されており素晴らしいところでした。アウトドアに興味のあるかたがおられればご一報ください、ご案内させていただきます。

美々津はゴルフに釣りにと楽しいところです。みなさんも是非遊びにきてください。楽しみにしております。

自然と遊ぶ

黒　木　俊　政

40歳を迎え、厄年ともなると自然の美しさを鮮烈に感じることができるようになるようです。昭和40年代の末に高校を卒業し、東京での１人暮らしをはじめた頃には宮崎はひたすら田舎のイメージでそれらの自然の豊かさには全く関心を持っていなかったように思います。木々の緑の豊かさ、花々の可憐さを実感できるようになったのは30歳に入ってからでした。近年は週末に山や川に行くことが我が家の最大の贅沢になっています。山でトレッキングをし、お弁当を楽しんだり、馬に乗りいわゆるホーストレイルのように野山を駆けるのは楽しいものです。そこに最近加わったのが川遊びです。特に目下の我が家の楽しみはリバーカヤックです。

ここで少しカヤックの説明をします。日本では一般的にはカヌーと呼ばれるフネにはカヤックとカナディアンカヌーの２種類があります。カヤックはクローズドデッキタイプのフネでパドル（手漕ぎボートのオールに相当する水をとらえて推進力に変換する道具）は１人に１本で左右を交互に漕ぎます。最近はカヤックもリバーカヤックとシーカヤックの２種類があり、リバーカヤックは文字通り川専用のフネです。それは回旋性には優れていますが安定性には（特に初心者には）欠けており、沈（「ちん」と読みます）しやすいという特徴を備えています。

何回かのカヤックの特訓の後、家族で九州で一番の清流と名高い熊本県の川辺川に川下りに行って来ました。川下りは９月でしたが沈してもさほど寒くは感じない程度の気候でした。川の水自体の美しさは勿論のこと川の周囲の自然の木々や岩の見事さ、川の中の魚の種類の豊富さや大きさなどに家族みんなで歓声をあげてしまいました。自分の小さかった頃の川遊びで見ていた自然がそこに丸ごとありました。川の中の魚の確認が可能であったのはカヤックから川底を手にとるようにのぞけるほど水が澄んでいたのもありますし、たびたび沈して直接川底に接することができたという幸運（？）にもよります。昼食は岸にフネを着け、皆で食事です。今回は弁当をつくる時間がなかったのでコンビニの弁当でしたがそれでも最高の昼食でした。

自然の美しさが素直に心に沁み入るようになったのは今の私にとって幸せなことです。例えば小雨の直後、木立から立ち上る山の霧の美しさ。これは山の木々の呼吸からつくられたものです。これからもできる限り自然と遊んでいきたいと思う今日この頃です。

医局長雑感　平成８年を振り返って

帖　佐　悦　男

平成８年も、Ｏ－157をはじめ世間を脅かす事件が発生しました。教室としては教室主催の全国規模の学会が本年より始まり、いつもに増しあわただしい一年であったと思います。

本年は、９名のヤングパワーあふれる新入医局員を迎えることができ、西日本整形外科スポーツ医学研究会（親善野球大会）では、一軍・二軍アベック優勝することができました。また、研究会が無事成功のうちに終了することができましたのも、先生方の御協力のおかげと感謝いたしております。

さて、同門会便りに記載しました本年の教室の抱負を振り返ってみますと、

１）教室主催の学会（日本側弯症学会、西日本整形外科スポーツ医学研究会）の成功および親善野球大会での一、二軍アベック優勝、２）新入医局員の多数の入局、３）同門の先生をはじめ関連病院の御要望にお応えするを挙げておりました。

政治の社会では、公約は守られないことが当然となっておりますが、当教室ではどうであったか・・・・・１）に関しては、スポーツ医学研究会を無事終了することができ、また、野球大会でも一、二軍アベック優勝という快挙を成し遂げることができました。側弯症学会も目前に控え、準備などの最終チェックに入っているところです。一会場の学会ですが、３人の外人講演もあり、ぎっしりとプログラムも組まれておりますので実りのある学会になると確信しております。２）に関しては、当初予定していた人数にはおよばず、９名の入局となりマンパワー不足の解消にはいたりませんでした。しかし、大学内では入局希望者トップの科となりましたことは、医局員をはじめ、先生方のご協力のおかげと感謝いたしております。３）に関しては、本年は臨時の御要望についてはお応えできたと思っております。しかし、人事に関しては関連病院の充実を以前からいわれており、一部では実行できておりますがまだまだの病院が多く、また、やむをえず派遣を中止した公立病院もありました。できる限り、非常勤からご協力をと思っておりますが、絶対的マンパワー不足（医大も不足しております）のため十分御要望にお応えできておらずこの場をお借りしましてお詫び申し上げます。可能な範囲から御要望にお応えするよう今後も教室として努力していかなければならないと思っております。そのためにも、多数新入医局員が入局するようご協力お願い致します。

三水会費をはじめ、その他教室に対し日ごろより御支援、御協力を頂き有り難うございます。会誌をお借りし、心からお礼申し上げます。

今後も教室ならび教室員に対し御指導、御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

末尾となりましたが、同門の先生方の、ますますのご繁栄とご健勝をお祈り致し終わりとさせていただきます。

一年間本当にありがとうございました。

SIROTに参加して

鳥取部　光　司

平成8年8月16～23日オランダアムステルダムにてSIROT・SICOT国際学会が開催され、SIROTに参加する機会を得ました。SIROTでは、教授の座長セッションを始めとして、柏木先生、樋口先生、私と特に問題もなく発表を終えましたが、私としては、やはり英語力の必要性を痛感させられました。国際学会の雰囲気を実感でき、また、夜には、パーティーがあり、普段は話すこともできないような高名な先生方と食事を共にし、貴重なお話を聞かせて頂くことが出来いろいろ勉強になりました。4泊と短期間だったため、本来なら学会以外の時間はほとんどないのですが、C先生が短時間で充実したプランを捻出され、オランダ観光もできました。オランダは、非常にのどかで気候も大変良く、建物ではレンガが印象的で、巨大な長崎ハウステンボスという感じでした。風車、木靴工房、チーズ工場などを見学し、また船でマルケンに渡り、小さい頃からイメージしていたオランダの世界にひたることが出来ました。

下記に、飾り窓で知られるアムステルダムの歓楽街に足を延ばしていった時のいつも行動的なC先生が御活躍されている御様子を紹介致します。

「オー飾り窓で写真を撮ったら五体満足に帰れんぞ。」我がC先生は、どうしても飾り窓に行きたいとのことで、観光中の会話では、飾り窓という言葉が頻回にでてくる。ガイドブックをいくつもとり出し、場所も、電車の乗り方も完全に把握したらしい。そして最終日の夜「ようし、今日あたり、飾り窓に行くか。」私と柏木は、答えなかった。「こんな夜遅くに、やめましょう。なにが起こるかわからんですよ。一人で行ってくださいよ」と柏木は、冷たい言葉を浴びせた。「柏木は絶対大丈夫や、日本人にはみえんが、パキスタン人やな。おい、教授も誘うぞ」とC先生は、笑いながら、全員を強引に連れていこうとされる。「教授に何かあったらそれこそ大変ですよ」と、二人でこれはなんとか思いとどまらせた。「先生襲われたらどうするんですか」。「そん時は、アチャー！」C先生は、夜の路上で怪鳥音を発しながら中国拳法の真似をされた。「撃たれますよ、先生。」我々はそう言いながら、回りに人がいなかったかを確認していた。結局、C先生の何かにとりつかれたような決意は固くどうすることもできず、我々は、無力感にかられながら出発した。夜の町は、電車を待っているだけでも不安で恐く、でかい体の外人がこっちを見てる気がする。「カモと思われてますよ、先生。」「そうやな」C先生も一言。今までたびたび危険な目に遭っているためか、C先生もきょろきょろしてる。不安なのか、大胆なのか良く分からない。そう思いながら我々は移動していた。

飾り窓のある路地は、狭く、大人二人がやっとすれ違いができるほどの幅しかない。大勢の列をなした怪しげな外人さんたちとすれ違う。ウインドウの中では女の人が手まねきしている。「もう帰りましょう。」「心配せんでん入らんが、大丈夫やが、しかし日本人てばれたとたん10倍らしいぞ。」そう言いながらC先生は、建物の奥へ奥へ

と、どんどん入っていく。我々は、まだ行くのかと、驚き呆れ、困惑しながらC先生の後を離れないよう声に従っていた。しかしさすがのC先生もあまりの雰囲気の異様さに最後の一線を越えることは出来ず（始めから予想されていたことだが)、私たちは無事にホテルに帰ってくることが出来ました。

以上、観光のみならず、飛行機の乗り方から、電車、タクシー、食事などにおいても瞬時に判断されるすばらしいC先生に御配慮を頂きましたお陰で、学会の目的は十分に達成されるとともに、予期以上の成果をあげることができました。これも綿密な御企画のおかげかと存じ、厚くお礼申し上げます。また、今回の学会に参加して、いろいろ学んできたことは、今後の指針として活用し、微力ながら少しでも大学のためになるよう努力していかねばならないと考えています。

未筆ながら学会発表の機会を与えてくださいました田島教授に、この紙面を借りまして心より感謝申し上げます。

1996年　夏

樋　口　潤　一

平成8年8月16日から19日までオランダ、アムステルダムで第7回のSIROT（国際整形外科基礎学会）が行われ、田島教授、帖佐医局長、鳥取部先生、柏木先生とともに私、樋口もこの学会に参加する機会を得ました。学会に夏休みを併せて約2週間ヨーロッパに滞在した間に体験したことを報告したいと思います。日本を出発したのは、他の先生方より2日ほど早い8月13日で関西国際空港からパリ経由でアムステルダムに入ったのは現地時間の13日の夜8時頃でした。まだ明るく、日本の夕方の感じでホテルに到着して一息ついた9時頃から空が暗くなっていくような感じでした。先にアムステルダム入りした理由は、翌14日に、Ajax Amsterdamという有名なサッカーチームの新しいHome stadiumのオープニングゲームが行われると言う情報があり日本でチケットを手配してもらいその試合を観戦に行くという学会とは全く関係ないものでありました。当日はホテルフロントで交通手段を聞き、トラム（アムステルダムの路面電車）とメトロ（地下鉄）を乗り継いでstadiumに到着したのですが、電車の中で人混みに埋もれてしまうという体験を生まれて初めて体験しました（回りは自分より背の高い人間ばかりで、普段人混みで人の頭の上ばかりを見ている人間にとってこの体験は貴重な体験でした）。stadiumはAmstel Arenaという名前の開閉式ドームのサッカー場で、宇宙船を思わせる近代的な外観をしていました。（写真1参照）中にはいると、これが本場のstadiumという雰囲気で、しかも行われた試合がAjax V. S. AC Millanというカードで、特にAC Millanは前線にジョージ・ウエア、サビチェビッチ、ロベルト・バッジオ、2列目にデサイー、アルベルティーニ、ボバン、ディフェンスラインはマルディーニ、バレーシ、コスタクルタにAjaxから移籍のライツィハーと錚々たる顔ぶれで、まさにドリームチームといってもよい顔ぶれでした。またAjaxには昨年トヨタカップで来日したメンバーに加えてアトランタオリンピックで日本を苦しめたナイジェリアのババンギダがオリンピックの時と同様に自慢のスピードを生かして右サイドを疾走していました。さらに後半からはMillanはFWにシモーネ、中盤にAjaxから移籍してきたダビッツが登場、しかも古巣のホームに登場したダビッツに対してはこれ以上無いブーイング（特にAjaxの選手に対してファウルをしようものなら、スタジアム全体がブーイングに包まれるほど）で（サッカーに興味のない方には

何が何だか分からないと思いますが）本当にヨーロッパのサッカーを満喫した一日となりました。

さて、今回の旅行の本来の目的は学会発表であることは忘れずにアムステルダム市内観光を楽しんだ3日間の後についに学会が始まりました。今回は今までのリサーチのまとめの意味での報告で、展示発表でしたので早めにポスターを掲示し指定された時間に自分のポスターの前に立ち自由にディスカッションを行うというもので、いくつかの質問とサジェスチョンをうけ、無事に学会を終えることができました（証拠写真、写真2）。

8月19日朝、アムステルダムを発ちウィーンへと移動しここで3日間を過ごしました。ウィーンは非常に落ちついた町並みとそれに反するような交通量でかなりの車がかなりのスピードで走っていました。夏の期間は、ウィーンのオペラハウスはお休みで、その代わりに市内のあちことで小さなコンサートが夜行われており、ヨハンシュトラウスコンサートに行くことにしました。コンサートは夜8時からで、夕方から軽く食事をしてからコンサートに行こうと言うことで、通り（ウィーンのメインストリートの一つ）のカフェのテラス（通りにテーブルと屋根がある状態の所）で食事をしていました。すると、通りを歩く人の中にこちらをじっと見ている外人（実はこちらが外国人であちらが地元の人なのですが）がいるのに気づきました。よく見ると、2年前にGOTS fellowで宮崎にやってきたDr. Klaus Dannでした。彼はどこかで見たことのある東洋系の人間がいるなと思ったらしく（本人の弁では、こんな顔をしたアジア人は自分の頭には一つしかインプットされていないということでした）、偶然の再会を、しかもウィーンの町の中で果たすこととなりました。翌日は、午前中はドナウ川遊覧船に乗りドナウの本流を船で観光し、午後からはDannの案内でウィーンのお城でDann夫妻（写真3）とともにランチをとり、夜も食事につれていってもらい、非常にお世話になってしまいました。これも何かの縁なのかなと思い、遠い異国の地でたった一人しか知らないオーストリア人のDannに再会できた偶然に驚き、幸運に恵まれたことに感謝したウィーン滞在でした。その後、ミラノ、パリと回り、8月25日無事に帰国した私を待っていたのは、4日後に迫った整形外科スポーツ医学会でした。時差ボケをする暇もなく筑波まで出かけねばならず、疲れを感じ始めたのは9月に入ってからでした。

学会場前で

Dann夫妻と

MY HOPE

AHSAN MOHAMMAD RASHEDUL

I came to Japan from Bangladesh about 10 months back, as a Japanese goverment scholarship student in Miyazaki Medical college Dept. of orthopaedic surgery under prof. N. Tajima.

Actually from my childhood I had a dream to come to Japan for higher education. Now it is fulfilled, And I am really grateful to prof. Tajima who helped me to come to Japan.

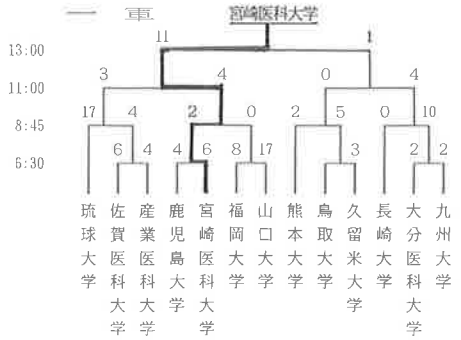
During my stay in Japan what research I will do is undecided yet. But I think soon it will be decided. As because I am an orthopaedic doctor I want to do work on bones such as bone cell activity. I also want to participate actively in clinical works and operations, so that when I shall return to my country, I can say these operations are learned from renowned Prof. Tajima. Though still I am lack of Japanese language but hope soon I shall overcome this problem. After thst everything will depend upon Prof. Tajima whether he will permit me or not.

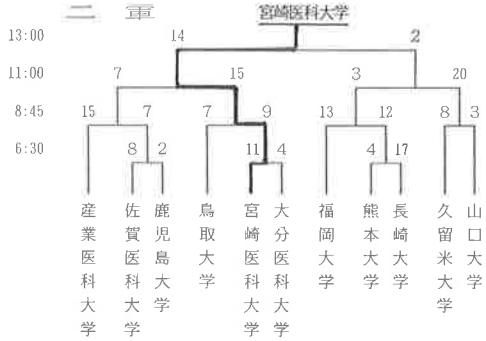
After completion of Post graduation in Japan I want to return to my country and join my previous job as an orthopaedic surgeon. My ambition is to become a prof. in future. But I don't know whether this is just a dream for me or anything else, time will say. A large number of people are suffering from different orthopaedic problem and even before death they can not get in touch with the doctor. The condition of my country is not like Japan and modern treatmnt facility is far away from the poor people But I will try my best to give service to the distress people by the grace of almighty God.

第３回西日本整形外科
スポーツ医学研究会
H8. 8. 3

第39回西日本整形外科
親善スポーツ大会
H8. 8. 4

田島会長挨拶





一・二軍揃って

裏方さん、応援団と一緒に

特集１．野球

17年目の初優勝

田　島　直　也

宮崎医大整形外科野球ティームは、昭和55年から始まった。私が赴任して翌年であったが、初めは皆が１つにまとまって何かやろうというくらいの気持ちからであった。宮崎の緑と太陽にちなんで“Sun and Green”のティーム名をつけ発足した。当時は９人集まるのがやっとであった。エース戸田、岡田、渡辺雄と野球好きの者も何人かいたが、試合は学内、学外とも全敗、西日本整形野球大会も２軍からのデビューであったが、全て敗退、このまま１勝も出来ないのではないかという不安がよぎったのも事実であった。

昭和57年には、中村、松本君らが入り、中村君の頭脳的ピッチングでティームは少しずつまとまり、この年福岡での西日本野球大会は、たしか雨で各大学１・２軍１ティームでの試合を行い、運にも恵まれ、準優勝したとの報告を留学中であったカナダ（トロント）で聞くことができた。

この頃の西日本整形野球大会は、前夜祭が盛んで、各大学夫々の出し物でのまさに芸能大会のようであった。我々も毎年、ジャズダンス、ひょっとこ踊り、アルゼンチン・タンゴと１か月位前からは野球練習よりも熱が入るほどであった。この頃は、鳥取大が全盛であり、前年優勝の鳥取大にスクイズで２点先攻したこともあったが、最後には強打に屈した。中村投手で負けたら仕方がないという気が、私自身も又ティーム全体にもあった。

昭和58年、宮崎で初めての西日本大会が木村千例会長の下で開催された。全員５時30分集合、ＯＢの押川先生らにも無理に出場してもらったが、１・２軍とも初戦敗退であった。

昭和63年、待望の野球部から黒木た、柳園、浪平が入局し、柳園投手がデビューした。これで上位進出が出来ると臨んだ沖縄大会も、初戦で長崎大と同点になり２アウトフルベースでの攻防で、やはり敗退してしまった。この時、レフト柏木が返球時に肩を脱臼し、後遺症は現在まで続いている。

しかし次第に、院内では勝てるティームになり、私も監督賞をもらったりしたが、西日本の壁は厚かった。

平成元年には、園田、黒木りの俊足コンビ、さらに平成２年、松元、黒木ひ、工藤と入ってきて、今年こそと出場した長崎大会では１回戦で長崎大に柳園投手の好投で勝つも、２回戦の九大戦で松元の足がひきつるaccidentもあり、２回戦敗退。

“特徴あるティームを作らないとだめだ”“先生が監督すると皆が意識してしまう。もっとリラックスしてやらせた方がいい”等多くのアドバイスがあった。

平成３年矢野、平成４年福元、関本らの入局によりティームの補強も進み、平成５年には、山口大会で松元キャプテンの下、準優勝を果たし、仙台での全国大会初出場となった。１回戦で東京女子医大に勝つも、２回戦は九大と当たり、矢野の幻のホームランもあったが、ここで惜敗。私としては、勝ち越す唯一のスクイズチャンスに、福元に強打を指示したことが悔やまれた試合であった。

平成６・７年は西日本大会に私は２軍で出場、２軍の楽しい野球をenjoyし、平成７年は２軍初優勝を飾ることが出来た。しかし、１軍の方は、平成６年、７年と２年続いて思ってもみなかった初戦敗退、少なからずショックであった。

平成８年は宮崎大会、私がお世話する最後の大会である。石田、有住らの野球部からの入局もあった。大会は13大学、１・２軍合わせて９会場の確保と炎天下、優勝までは１日４試合と過密スケジュールである。

安藤から「先生、このティームで優勝しないともう出来ませんよ。先生が１軍にいて、一緒にやって下さい」といわれ、今年こそと必勝の思いで試合に臨むことになった。まず、矢野を投手から捕手にコンバートし、石田―矢野、安藤―工藤の２組のバッテリーを作り、初戦は鹿大、石田の好投とキャプテン松元の好打で初戦突破、２回戦山口大は、安藤のノーヒット・ノーランで、２：０で勝った。続く準決勝は、今年の全国大会で準優勝の強豪琉大、石田は２回までに３点を取られるも、我が方も負けじと点をいれ、特に２回の４点目は有住にスクイズのサインを出し、見事に成功した。結果的にはこれが決勝点になり、４：３の辛勝であった。決勝は、大分医大に打ち勝ち、ここに昭和55年ティーム結成以来実に17年目の１軍初優勝を勝ち取ることが出来た。２軍も２年連続優勝し、アベック優勝の花を添えることが出来た。長い道のりであった。

たかが野球、されど野球である。

ここまでSun and Green結成から17年間にわたり、参加した人、協力してもらった多くの方々に心から御礼を申し上げます。

一軍優勝メンバー

3	（7）	井上
6		有住
7	（1）	安藤
5		松元
1	（3）	石田
2		矢野、工藤
4		福元
8		黒木ひ、関本
9		川添
H		柳園
監督		田島

二軍優勝メンバー

1	園田	・川野
2	帖佐	・森
3	野辺	・前田
4	山口	・吉田こ
5	樋口	・渡部
6	野中	・濱中
7	吉田	・渡邊
8	松岡（渡部）	・河原
9	黒木り	・栗原
		・山本
		・本部
		・坂本た

1軍優勝―観戦記

岡　田　光　司

8月の昼過ぎの炎天下の宮崎市営球場、待望の1軍の初優勝が最終回のダブルプレーで決まった。安藤投手の好投、内外野の好守備、打線活発で既に10点余りのリードとなり、試合の雰囲気はもはや勝負ありの緊張感の乏しいものであったが、それにしてもあっけない幕切れであった。しかも終わって見れば1・2軍とも大差でのホームグラウンド優勝で、成績としてはこれ以上のものはないであろう。とにかく田島監督、1・2軍の選手の皆様方にはこれまでの猛練習が実を結び、本当におめでとうございました。

それにつけても思い出されるのは昭和55年の初出場の山口大会や、昭和58年のこの球場での初の宮崎大会です。いずれも早々の敗退という結果で、チーム力の低さと勝利の壁の厚さを思い知らされ、1軍の優勝など縁遠く感じて現在に至っておりました。今回は待望の初優勝の試合を野球部設立17年目に観戦できた事は、私としてもこれまでの不安がようやく解消された心地です。戸田先生を先頭とする家族応援団の賑やかな声援の中、市営球場での記念すべき優勝戦が行われた平成8年の夏は、本当に思い出深いものとなりました。

第39回西日本親善野球大会報告

元事務局主務から

川　越　正　一

野球大会も１・２軍優勝で幕を閉じました。報告文を書くにあたり、まず、球場係として裏方の仕事をしていただきました先生方、さらに球場を貸していただいた各施設の関係各位に改めてお礼を申し上げます。

医局長からグランド手配係という話だったのですが、いつの間にか事務局主務という、もったいない要職を拝命しておりました。

グランド選定および確保においては、運動公園を断念せざるおえないという予期せぬ状況に陥りました。しかし、教授はじめ事務局の皆様の、迅速かつ必死、粘り強く時に大胆な働きかけで、なんとか使用可能となりました。教授曰く、「２アウト、満塁からの逆転ホームランだねー。」

また使用グランドを集中させる意味から選択した清武河川敷が、直前の下見で内野グランドが小石だらけ、外野グランドは一面が膝までの草、バックネット付近には壊れたベンチという状況で唖然としてしまいました。このため、粘り腰の医局長に登場をお願いし、清武町役場と交渉していただき、整備を約束していただきました。さらに前日には、教授以下大学医局員に加え、関連病院の先生にも応援をしていただいての草むしり、石拾い大会となりました。

当日も早朝より遅刻者もなく（Ｓ教祖も）、大会運営にあたっていただき、順調に試合を行うことができました。さらに、大会終了後はＨ講師をはじめ、医局では長老と言われている先生方を中心に、吸いがら拾いなど後始末まで手伝っていただきました。

清武役場で事務員と間違われたりしましたが、貴重な体験を得る機会を与えていただきました、医局長先生に特に感謝申し上げ、事務局主務からの裏方報告を終わります。

1軍初優勝おめでとう！ありがとう！

松　元　征　徳

平成8年8月4日、午前2時の丑三つ時、辺りは静寂に包まれて、恐ろしい程の魔物が、私の心をしばりつけていた。こんな寝苦しい夜は、初めて女性と添い寝した時以来だ。イヤ、今回はそういう物とは違う。歯をくいしばって、体中に力が入っている事を、30分に1回ほどの間隔で気付き、タバコの火をつけた。セミの鳴き声が、一段と激しくなった、ついに一睡もできなかった。……

地元開催、勝って当たり前、アベック優勝、優勝海外旅行などなど、まさに多欲の勝利が南米のカーニバルの様に流れていた。日本シリーズで全く打てずに、一睡もできなかった巨人軍の元4番、原辰徳の涙のホームランインタビューが頭をよぎった。絶対勝たなければ、監督（教授）を胴上げしなければ・・・と、スパイクのひもを何度もしめなおした。さて、前置きはこれぐらいにしときましょう。

今までの練習は紙面が足りませんので、あえて書きませんが、練習した分だけ当日は緊張していたと言えば、スポーツをされた方であればおわかりだと思います。

一回戦は鹿児島大学。春の選抜で優勝した鹿実の卒業生はいないだろうかと不安がよぎる。新戦力に、ガルベスこと、I先生を先発に、華麗な守備が売り物だが、大会数日前より胃炎に苦しんでいるAr先生を加えてのぞんだ。少ないチャンスを確実に得点に結びつけ、守備も大きく乱れる事なく6－4で、初戦突破をはたした。2回戦は山口大学。過去に一度、対戦した事があるチームだが、大会屈指の右腕を擁する強豪である。終盤まで0－0の息づまる投手戦。ジャニーズ系An先生のおしゃれなピッチングはアメ車カマロの様に光った。それを援護するかの様に、K先生、I先生の活躍で2－0で勝った。準決勝は琉球大学、教授は“絶対勝たないといかんもんネ”とこの日、何度か目の檄を飛ばした。それは、だれもが解っていたが、全国大会準優勝チームを前に具体的な作戦はなかった。結果は激戦の末、4－3で勝利をひろった。決勝点は教授の決断したスクイズのサインであった。本当に久しぶりに出した教授のスクイズのサインを見事にきめたAr先生の胃粘膜を心配したのは私だけだろうか。決勝戦相手は連覇をねらう大分医科大学。しかし、波に乗った我がチームの敵ではなかった。11－1の大差で優勝に花をそえた。

夢にまでみた優勝。喜びを実感したのは、疲れを吹っ飛ばした医局長の“おめでとうー”と大きな声で叫ばれ、顔面に唾をかけられた時であった。教授から優勝旗を手渡された時は、その笑顔に包まれ何ともいえない安堵感を感じた。

最後に優勝まで導いてくれた裏方の皆様に、そして、猛暑の中、応援してくれた皆さんに、本当にありがとうございました。

2軍2連覇なる！

（西日本整形親善野球大会を終えて）

園　田　典　生

朝5時30分清武河川敷球場に集合したのは昨年度優勝メンバー＋新人2軍選手＋Dr.Cであった。練習量では確実に1軍選手をうわまわり、その顔には自信が満ちあふれていた。今回は、バッティングセンターにも診療の合間に暇をみつけては通い、全試合昨年以上の得点をあげるつもりでいた。唯一心配だったのが、前日のミーティングで席をはずしていた3番打者N先生がきてくれるかどうかであった。先生は一見ボーっとしているが、やるときにはやるということを医師会病院の仕事ぶりで私は知っていた。やはり来てくれた。全員、前日草むしりをして下見十分のグラウンドに集合した。組み合わせは最悪であり、このパートを勝ち抜いたチーム（宮崎医大、大分医大、鳥取大学）がまず優勝するとの前評判であった。大分医大との1回戦では11対4と比較的楽に勝てたが、鳥取大学との試合では、前半はピッチャーY先生の速球に相手はまったく手がでずこれも楽勝と思われ、途中でW先生の先生の足では無理と思われるベースランニング＋転倒という“雪だるまならぬ泥だるま状態”のご披露もあり爆笑状態であった。後半はその油断があったのか采配ミスで点数を取られ、2点差の9対7で少しひやりとした場面もあった。（Y先生が投げている間は、まず相手に大量得点を取られることはないことを確信できた試合であった。）3回戦からは球場が木花にかわり、まず産業医大との試合であった。個人的にも満足できる試合で結果は15対7であった。ベンチの応援も盛り上がり、選手にとっての圧力はC先生の人事攻撃（野球の成績が人事に影響する可能性があるのは、我が医局だけであろう。）のみとなった。決勝戦では久留米大学との試合であり、球場も本格的となった。前回の福岡の球場とは比較できないりっぱな球場であった。（K先生ありがとうございました。）最後まで先攻、後攻のジャンケンは負け続け、後攻となった。この試合、いきなり私自身が肉離れを起こし戦線脱落となったが、まったく影響なく（次回はベンチでC先生のかわりをしようかと思いました。）Y先生の速球は衰えず14対2と相手に少し同情する結果であった。またその試合の途中で1軍の情報も耳にはいり、いよいよアベック優勝かと思ったがこれまで幾度となく期待を裏切り続けた1軍のことだからと1軍の試合状況を考える余裕があった決勝戦でした。

今回の大会を振り返ると、2軍の顔であるK先生が子供さんの急病で出場できなかったことが戦力として心配されたが、それでも優勝できたことから2軍の選手層としては群を抜いていることが実証されたと思う。来年もこのチーム力を維持し3連覇をと思います。

第30回日本側彎症学会
平成8年11月22・23日

会長挨拶

Mcmaster先生の講演

Winter先生の講演

Asher先生と竹光先生

シンポジウム

活発な討論

第30回日本側彎症学会を終わって

田　島　直　也

第30回日本側彎症学会は去る平成8年11月22日(金)、23日(土)の両日にわたり宮崎で開催し、盛会のうちに終了することができました。これもひとえに教室・同門会の諸先生をはじめ関係各位のご支援・ご協力のお陰であり、ここにあらためて御礼申し上げます。

九州で開催するのは研究会から数え第14回の1980年（角田信昭会長）、第16回の1982年（竹光義治会長）に次いで3回目、14年ぶりでありました。

今回の主題（テーマ）として先天性脊椎変形（側彎症）を取り上げました。これは第22回（1988年）渡辺秀男会長の時に取り上げられましたが、先天性脊椎変形は側彎症の中でも難治性で、また、重症化を呈するものであります。これに対する問題点につき山本・渡辺両先生の座長の下でシンポジウム形式で行われ宮医大からも作君が演者として参加しました。

また、主題に関してEdinburgh（U. K.）からMcMaster先生をお招きしました。先生は、Princess Margaret Rose Orthopaedic HospitalのConsultantでありますが、著名な側彎症の権威のJ. I. P. James先生の後任で、同病院はScotland一円の側彎症センターであります。多数の先天性側彎症治療のご経験から“Congenital Scollosis”についてすばらしいご講演が行われ、後で順天堂大の山内教授から「講演内容は明確で目から鱗が取れるようだった。講師として非常によかった。」とお褒めの言葉をいただきました。

特別講演の山田・井上メモリアルレクチャーには、総合せき損センター所長（旭川医科大学名誉教授）竹光義治先生に「脊椎矢状面弯曲異常の意義とその治療」についてをお願いしました。これは、長年の竹光先生の御研究の集大成でもあります。

その他、22日 Luncheon SeminarにはU. S. A. Minnesota Spine Centerより世界的権威を持つWinter教授に“The Fundamentals of Spinal Instrumentation for Spine Deformity”を、23日は来年のSRS（Scoliossic Reserch Society）の会長であるUniversity of Kansas Medical CenterのAsher教授に“Surgical Treatment of Adolescent Idiopathic as Imperfect Torsions”をお願いしました。今回は平成5年の日本整形外科スポーツ医学会の外人講演と違って、同時通訳を用意しませんでした。しかし、講演後も活発なdiscussionがあり、全体的に理解してもらうことができたようです。

2日目の午後は、McMaster先生御夫妻、Asher教授を綾に御案内し、宮崎の秋を楽しんで頂きました。

今回の学会の全体の演題数は特別講演を含め60題でした。側彎症に取り組んでいる整形外科医は整形外科の中では少数かもしれませんが、一堂に集まり同じ問題につき発表・討論するのは意義があることと思います。しかし、病因、評価、治療にしても少しずつ進歩してますが、まだまだ未解決の問題が残っています。参加して頂いた先生方

が、少しでも得るものがあり、参加してよかったと思って頂けたら幸いであります。

2年前から本学会に向け教室をあげ準備して参りました。いろいろ御迷惑をおかけしましたが、ここに心から関係各位の方々に御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

第30回日本側弯症学会を終えて

事務局　帖　佐　悦　男

本年は、学会のため多忙な年でありました。最初は、皆様ご存知のように、8月に開催されました西日本スポーツ医学研究会も無事終了し、翌日の野球大会では一軍、二軍アベック優勝を遂げるという快調な滑り出しでした。

また、11月22・23日には、第30回日本側弯症学会を開催致しました。詳細につきましては、久保先生の報告をご覧下さい。

事務局の裏方につきましては、いつもながらの看板やプロジェクターの準備はもとより、外人講師の先生方の送り迎えや、会場ではスクリーンの大きさなど初めて学会に使用する会場でしたので戸惑いもありましたが、皆様方のご協力でスムーズにおこなうことができたと思います。

この事は、普段より教室に対して応援して頂いております同門の先生方の有形無形のご協力の賜物と思っております。紙面をお借り致しまして、お礼を申し上げます。ご協力ありがとうございました。

第30回日本側弯症学会を終えて

久　保　紳一郎

さる11月22・23日に当教室主催にて第30回日本側弯症学会を無事に開催することができました。私は作先生とともに副実行委員長という大役を頂きましたが、何から始めたらいいやらさっぱりわからず、会場の設定・抄録作成など諸々の重要な仕事は平川・帖佐両先輩＆有能な女性陣に『おんぶにだっこ』状態でした。（本当に無能で御迷惑をおかけしました。）当日は私は進行・会場係を受け持たせてもらいましたが、特に、多岐にわたる多くの質問にもかかわらず時間内（秒単位！）に討論をうまくまとめられる座長の先生方には驚かされ流石に一流の先生方だなと感服せざるを得ませんでした。招待講演およびLunchon seminerとしては、竹光名誉教授と３人の外国人講師（Prof：Mc Master，Prof：Asher，Prof：Winter）に来て頂きました。竹光教授からは側弯症についての永年の御研究から多くのoriginalな知見をわかりやすくお話しして頂き、先生の御業績とお人柄に触れることができました。Prof：McMasterは先天性側弯症の豊富な経験について話され、奇形椎摘出をなんと１～３歳時でも行なう（内反足と同じですとのこと……）とのことで会場から感嘆のため息が聞かれました。Prof：AsherはISOLA systemの開発者でその理論と症例（excellent!!）について話されましたが、最後に“good is enemy of the best. best is not too good”という先生の信念ともいうべき言葉をスライドに出され私などは目から鱗が落ちる思いでした。Prof：Winterは各種instrumentのbiomechanicalな比較について話されました。どの御講演も先生方の並々ならぬ熱意が伝わってくる内容で参加者にとって大きなはげみになったことと思われます。

そうこうするうちに何とか大きなミスや遅れがなく（と思っているのは私だけかもしれませんが）盛会のうちに閉会となりました。これもひとえに、同門の先生方および裏方の仕事にもかかわらず親身になって御協力頂いた関連病院・医局の先生方のおかげです。紙面を借りて御礼を申し上げます。

皆様本当にお疲れさまでした。

アナウンス嬢と進行・会場係

第30回日本側弯症学会を終えて

作　　良彦

第30回日本側弯症学会が、11月22・23日の両日、盛会のうちに終了することができました。一重に、同門会会員の皆様の多大なご尽力のおかげと考えております。今回、田島会長は、宮崎の地で本学会を開催するにあたり、『本学側弯症研究の発展となり、それがより高度な診療体制の確立に貢献できること。』を望んでいました。本学会での白熱した討論では、各地の側彎診療に携わる先生方の真摯な態度と情熱が感じられ、何らかの形で各同門会の先生方のお役に立てたのではないかと考えております。

私が担当しましたのは、副実行委員長としまして帖佐実行委員長の手足として、久保先生と伴に微力ながら学会運営に携わらせて頂きましたが、経験不足のためご迷惑をおかけいたしましたことをお詫び申し上げます。また、当科発表演題の選定では、学会開催が決定した2年前から試行錯誤しながら3題を目標にがんばりましたが、結局、主題の先天性側弯症に1題出すのが、精一杯でした。地元での発表ということもあり、そのプレッシャーはすごいものがありました。学会2週前の予演会でも、合格点に達することが出来ずじまい（この時点で、コンピューターが、壊れてしまい、データーの一部を再度入力し直し、）最後の1日でようやく完成しました。

22日15：40本学会の本題『先天性側彎症』が、始まりました。私は、2番目の演者として、玉砕覚悟の帝国軍人の心持ちで舞台に上がりました。口演は、声がうわずりながらもどうにか終了し、舞台上でのディスカッションを待ちました。主題最後の6人目の演者の口演が終わると舞台設営の川越先生をはじめ研修医先生たちが緊張した面もちで、手際よくテーブルと椅子を設置しました。緊張の中、舞台上の椅子に腰掛けると、早速、座長の渡辺先生から2番目の演者の先生に、と注文がつきました。返答をした後に、会場を見渡すと先生方、特に有名な教授が注目しているではありませんか。私は、今から8年前のMICCダイアモンド・ホールでの出来事を思い出しました。平静を装いつつ、進行係の席に目をやると、先ほど設営をした先生方や久保先生らが、心配そうにこちらを見ていました。先天性側彎症の自然経過につき、高知医大の長谷川先生とともに答弁が始まりました。座長の山本・渡辺両先生の進行で、何度か質疑応答を繰り返しました。その中で、北大の金田先生が立ち上がり質問された時が、最大のピンチでしたが、どうにか大事には至らずに済みました。自然経過についての討議が終わり、手術についての討議へと移りました。私も、ほっと一息の状態になれました。この主題での討議中、山本先生、渡辺先生の進行、Dr. Winter, Prof. McMaster, Prof. Asherの質疑応答では、会場に和んだ笑い声も聞かれ、貴重な経験をもとにしたご意見を聞かせていただき大変勉強になりました。討論時間の約50分も、座長の先生方の巧みな進行と活発な討議で短く感じてしまいました。ただ、残念な事は、手術において結論的な決定事項が少なかった事でした。いかに各施設がCase by case

で検討していて決定するには難しい問題が山積みになっているかが、解りました。

どうにか第１日目・第２日目とも、大きなトラブルもなく無事終了できました。

設営を撤去し、関係者にお礼の挨拶をして、後は打ち上げが残るのみです。

打ち上げでは、顧問の平川先生をはじめ、関連病院から手伝いに来てくれた教室員が、学会の無事終了を祝って乾杯をしました。あらためて、みんなが一致団結して学会をやり遂げられたことを、誇りに思いました。平川先生から、学会開催においての反省点と対処の仕方について御指導を受け、今後に役立てていこうと思います。最後の挨拶をさせていただいたのですが、これまでの経過を思い起こし、感極まり、少しウルウルの状態でした。いろいろ手伝ってもらった先生たちの活躍に感謝しつつ、Ｔ日本万歳会会長のもと、盛大な万歳にて本学会のすべては、終了しました。

今年は、西日本野球大会・第30回日本側弯症学会と、大きな行事があり、本当に皆様お疲れさまでした。

来年も、がんばりましょう。

Marc Asher先生にお付きして

黒　木　浩　史

第30回日本側彎症学会のため宮崎にお越しになられたMarc Asher先生を3日間、付き人としてお世話させて頂きました。そこでAsher先生のお人柄とその感想を少しお書きします。

Asher先生のお人柄について挙げるならまずなんと言っても真面目で大変仕事熱心だということです。11月22日の朝、先生は颯爽と宮崎空港に現れ、私と簡単な挨拶を交わすや否や「早く学会場へ行こう！」と言われ、ホテルに荷物を預けただけで休む間もなく厚生年金会館に向かいました。お昼休みにレストランでの食事をお勧めしても、「あと15分で午後のセッションが始まるからサンドイッチで結構。」とそそくさと行ってしまわれました。また移動中のタクシーの中でもおもむろにポケットの中からinstrumentの部品を取り出し、「僕はいつもいいアイデアがないか考えているんだ。」と話されていました。とにかく活動的で早歩きな方でした。その一方で、とても気さくで親切でもありました。私が拙い英語で質問しても分かり易くお答え下さり、また先生の質問が理解できない時でもだんだん会話のレベルを下げてまるで幼稚園生にでも訊ねるように嫌がらずに接して下さいました。あれ程世界的に有名で数多くの業績を上げられた先生が今になってもこんなに努力され、また威張ることもなく私のような若造にも一人の医師として接して下さったことは大変な感激であり、驚きでもありました。

それから人柄とは関係ありませんが印象深いこととして、先生のタフさが挙げられます。観光で綾の吊り橋に行った時、先陣をきって橋を渡りきったと思ったら、山道を遥か彼方まで往復され、今度は息つく暇もなく山を登って行かれました。周りの我々は息を切らし、ただ呆気にとられるのみでした。

私は側彎症について余り知識がないためAsher先生から学問的に高度なことを学べませんでしたが、その一つ一つの振る舞いから医師としてのあるべき姿はとても沢山学ぶことができたように思います。患者さんの事を考え、最良の施しを行い、その結果を謙虚に受けとめる。そしてその一方で常に貪欲に知識を求め、新知見を探求し、多くのことを学ぶことが大切である、ということを先生のその態度から強く教え込まれました。今度お会いする機会があれば少しでも側彎症について英語でお話できたらなと思います。それから歩き方が早くなったことも付け足しておきます。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えて下さいました田島教授をはじめ教室員の方々に心より御礼申し上げます。

Winter先生と

松　元　征　徳

Winter先生の接待係にと田島教授の方からご指名を受けた時は、はっきり言って驚きました。Winter先生というと先天性側弯症で、何度か文献で先生の名をみかけ、非常に勉強をさせていただいた、いわば、教科書的人物だったからです。それから、英会話の苦手な僕は、書店へ走り、ビジネス英会話の本とテープを買い込み、寝ても覚めても、テープを聞きながら、“Would you～, excuse me, ～, May I～,”と、とにかく空の上の存在のような偉い人と話す失礼のない英会話を３夜漬けで勉強しました。

緊張の空港での出会い、Winter先生の大きい事にびっくりしました。聞いた所２ｍ５㎝の身長でその握手した時の手の大きさは、今でもよく覚えています。何しろ、スライド準備の時、手袋をわたそうとしましたが、その手袋の小さい事に笑いが出ました。中型タクシーに何度か乗り込みましたが、狭くないかと聞くと、私は座高はあなたと一緒ぐらいで、足の置き場があれば苦にならないと言ってた様ですが、確かに横に座っている私と目線はいっしょぐらいでした……

懇親会の夜は約束では一次会でホテルへお送りするはずでしたが、何しろ知人の多い先生でまた、アルコールも好きな様で、結局、夜11：00まで、日本脊椎外科を代表する多くの偉い先生方といっしょに宮崎の夜をenjoyされ、帰りのタクシーの中では、非常に喜んでおられた様でした。日本はもう３度目という事でしたが、宮崎はマイアミとほぼ同じ様な大きさで温かく、長旅で多忙なスケジュールの中、ゆっくりできたのではないかと思います。

Winter先生は、現役を引退されていますが、先生によると、自分が、心身伴に、しっかりしているうちに、現役をしりぞき、若い医師を教育したいとの事でした。そのかわり、聞いた話では、その臨床カンファレンスでの態度はとても厳しく、私と話している様な感じとは全く違うそうであります。また、先生は非常に日本人に気を使う方で、Mc Master先生と話す時は（彼の考え方にかなり同調し、認めていました。）ほとんど聞きとれない英語でも私と話す時は、ゆっくり簡単な英語で話して頂きました。

私にとって胃に穴があきそうな２泊３日間でしたが、よい経験ができたと思っております。来年は“NOVAの日”を作ろうかなと思っている今日この頃です。

Heart to Heart

渡　部　正　一

今回、第30回日本側弯症学会の特別講演のために英国スコットランドからMcmaster先生ご夫妻をお招きしました。田島先生のご夫人と一緒に成田までお迎えに出向いたのですが、第一印象としては、先生は偉ぶらない誠の英国紳士で、ご夫人は周りのムードを変えてしまうほどの明るい方でした。その印象は滞在中変わることはありませんでした。

わたくしは決して英語がうまく話せるわけではなかったのですが、大変おやさしい2人のEnglish teacherのお陰で、最後には「英語が1日1日上手くなっている。」とお褒めの言葉まで頂くことができました。

ご夫妻は初めての日本滞在とのことでしたが、本国では緑茶を毎日飲んでいらっしゃったり、相撲にも大変興味をお持ちという日本通で、今回も日本の伝統文化に接したいとのご意向が随所に感じられました。タクシーを利用するより歩くことを望まれ、浜松町まで2駅程の距離を最後は駆け足でバスターミナルに駆け込んだり、日本庭園では1本1本の木々の名称を尋ねられたり、また歌舞伎も「まるでシェークスピアだ。」と大変興味を持ってご覧になられておりました。

宮崎到着後は、時差による疲れもかなり蓄積していると察せられましたが、学会期間中はほとんどの発表を聴かれておりました。言葉は全く分からなくても、スライドから大体内容が把握できるとおっしゃっておりました。「宮崎では何例くらい側弯症の手術をやっているのか？」との先生の問いに「今年は今のところ6例です。」とお答えしたところ、「うちのセンターでは週に2例ずつやってるよ」と言われ大変驚きました。特別講演においては、先生は分かりやすく丁寧な口調で語られ、自分としても貴重なご経験の一部を拝聴でき大変勉強になったと感じております。またご夫人におかれましても学会場に度々足を運ばれ、日本の演者の発表も聴かれておりました。本国では事務処理など様々な面でMcmaster先生をバックアップされているそうです。学会最終日に発表の途中でしたがご夫妻を昼食にお誘いした時に、「せっかく楽しんでいたのに」と残念そうに呟かれる表情が印象深く心に残っております。夫の仕事に理解し協力できる婦人の理想像を見た気がしました。

宮崎では主に綾を中心に観光していただきました。紅葉する山々を「スコットランドによく似ている」と評されておりました。宮崎を去られる時に先生はこう言われました。「君が宮崎に暮らしている理由が良く分かった。」

どちらが接待しているのかよく分からないような先生ご夫妻の日本ご滞在でしたが、日本そして宮崎に好印象は得られたと自分なりに確信しております。最後にこのような貴重な経験を与えて下さりご指導下さった田島先生ご夫妻に厚くお礼を申し上げます。このご滞在が、皆様への順風となり、更なる宮崎の整形外科の発展に寄与するものであることを祈念いたします。

特集３．開業○周年を迎えて

近況報告

山口政仁

Ｓ48年に、この地高鍋に開業以来22年がたちます。当初の10年、特に５～６年は外科医や整形外科医が少ない上に２次救急病院の受け入れ態勢が充分でなかったので、目の前にいる急患を処置し乍ら次の転送先の病院を探すのがひと苦労という毎日でした。頭部外傷や農薬中毒なども多数あって、県病院や古賀病院、江南病院、記念病院などに救急車に添乗して、しばしば転送したものです。その当時は夜間の受け容れを拒否される事も珍しくなく、止むなく当院の手術室で酸素バッグを押し乍ら夜をあける事もありました。その頃の宮崎県郡部の重傷急患への対応状況はひどいものだったというしかありません。

その後，宮崎市郡医師会病院、江南病院、西都救急センター等、近くでは国立療養所川南病院、都農町立病院、都農木佐木病院等の救急部や脳外、外科、整形、内科等の施設とスタッフが年々充実されて今日に至りました。今では、けたたましい救急車の警笛の音を聞き乍らも、次の転送先の確保については困る事がないので、安心して対応ができるというものです。

当初も今も、当院は「救急医指定」ではないのですが、開業当初から、消防署（救急隊）も警察も、当院を救急病院ときめこんでいるふしがあり、今もその状態はつづいています。午後４時頃になると「今夜は居られますか、先生は在宅ですか？」という定時の問いあわせが、児湯救急隊から毎日あります。最近は私もややくたびれ気味ですので、「不在」にしようかと思う事がよくあります。しかし、実際に要請コールがあると「自分が診ないと困るだろうな…、町民から何言われるかわからんのォ、開業医が20人以上も居るのに…」という人の声が聞こえて、ついＯＫしてしまうというのが実状です。ほぼ週に１回づつ整外と麻酔の教室から加勢をいただいて何とか町医者としての任をつないでいます。それに１年前からＰＴ２人もスタッフに加わっていますので訪問リハも少しづつ格好をつけています。

この10年、特に最近５～６年、高齢者の大腿骨頚部骨折が多いのは全国同じだと思います。当院でも、治癒後の高齢者の受け容れ先がなくて５人10人と院内に滞留し、しかも痴呆が多く、わめいたり、徘徊、便をつかむ、などで恰も精神病院の観を呈する時期もありました。そこで、今のはやりの老健施設を思いたって、去年12月にオープンしました。これで整形病棟の風とおしがよくなってほっとしたのもわずか数ヶ月で、すぐに老健61床が埋まってしまって、また元の状態にもどりつつあります。老健がすぐ埋まるという事は、この地域の高齢者、特に痴呆高齢者の問題がいかに急を要しているかということでしょう。

今後ますます増加する在宅要介護高齢者の処遇についての、行政（町）や福祉（社会福祉協議会）等とのかかわり方、それも整形外科の開業医としてのかかわり方がいやでも意識させられる昨今の状勢です。

所帯が小さい医師会に入って20年もたちますと、いやでも医師会の雑務（役員）を長いことさ

せられます。今の立場は副会長です。会長や他の理事との間にはさまって、その人間関係の調整が正に難業苦業です。

もうひとつの担当に児湯準看学校の副校長という役職があります。入学試験、入学式、戴帽式、始業式、終了式、卒業式等にひっぱり出されるのは仕方がないとしても、委託生と委託先の病医院とのトラブルや男女間のトラブルが発生するとまた職員会議となります。最近の頭の痛い問題として、病医院に委託して2年間で育てた生徒が委託先の病医院に定着せずに、卒業後すぐに他に移ってしまうという問題があります。準看護婦を医師会で育てる意味がないという意見も出る始末です。生徒の気持のありようも変わり、医師会員の「生徒を育てる、看護婦を育てる」という意識にもずい分とばらつきがあるので、学校の運営存続の問題も毎年度末のいやな議論のたねです。こうした日常的なトラブルをかかえている上にまたひとつ厄介な問題が生じています。

某医療法人が児湯地区内の倒産した某病院のベッド200床だけを取得して、あらためて、高鍋町にその200床の病院を開設したいという計画がもちあがっています。現在の高鍋町は2万余の人口に20ヶの病医院がひしめいています。現在の町内総ベッド数以上の大きな病院が突然進出するという事で、町内の医師会は危機感をつのらせています。この医療法人の、ベッドだけを買ってそのあと任意の場所を選んで地元の意志に関係なく大病院を開設できるということが、我々町医会員の納得できない点です。行政（町）と医師会との間には、予防注射、成人病検診、救急医療（日曜、祝祭日医療）、等の問題で適度の緊張関係にあります。行政（町）、住民、医師会、三者間の微妙な思惑の中で、医師会としての対応が迫られています。悩ましい日がつづきます。

今の同門の若い先生方がそうであるように私も仕事三昧、研究三昧、遊び三昧の時代がありました。年をとった田舎医者となった今、何とも、こむづかしい問題の雑務が、際限もなくつづいてきます。最近はスポーツ、リュウマチ、産業医、等の認定講義にほとんど出れないので、そのうち、資格喪失の裸医者になりそうです。

ほぼ1週間前に、押川先生から診療所の近況報告をという要請がありましたので、とりあえず現在の私の身辺に起こっている事、感じている事をなぐり書きし示しました。乱文をご容赦下さい。皆様のご健康を祈ります。

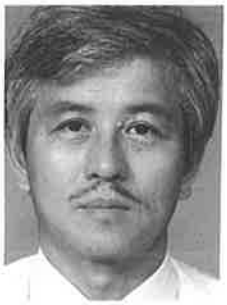
開業11年目を迎えて

菊田　勇

希望に満ちて開業しましたが、一公務員から院長職、庶務、人事まで兼ねなければならない職種は自分にはなじめませんでした。なかでも開院当初はバブル期の直前で人不足がたたり、看護婦の取得にはものすごく苦労しました。現在は人あまり時代でこんな苦労はないのではないでしょうか。いわゆるカルチャーショックで医療従事者とは、医療をしたいのか、ただ就職して給料にありつけばいいのか、自分としての結論はでていません。確かなことは、自分の経営がわるいということでありますが、とはいっても、医療にたいして自分以上に闘志を燃やしている人も大勢いることも確かです。

コンピューターはそれを扱う人のいうことはすべて応答し実行してくれますが、こと人間となると、どれが正しい仕事なのか思考する事は不可能に近いことです。人間だけは、ただ命令だけではうごきません。・・・坂道を登りながら考えた。意地を通せば窮屈だ。情に竿さしゃながされる。とかく人の世はすみにくい・・・「草枕」の一節だが、科学は発達しても人間の心は太古からかわることなく、医学を含め自然科学の分野が法的に犯されようとしている気もしています。マスコミも事実を曲げずに科学の勉強もしてから活動してもらいたいですね。

いつも、こちらが困ったとき応援をすぐおくってくれることにとても感謝しています。田島教授をはじめ医局の先生方に深く感謝しています。今後ともよろしくお願いいたします。



「寅さん」の如く

——開院5周年を迎えて——

川　野　啓一郎

熱狂的という程ではありませんが、実は私は、フーテンの寅さんの“隠れファン”なのです。

結婚前に、今の家内をデートで、寅さんの映画に誘いました。時間に遅れそうになり、それでも、最初の夢のシーンから見たくて、二人で一生懸命走った末にようやく間に合った記憶があります。25作の「寅次郎ハイビスカスの花」で、リリーと寅さんの、掛け合いが面白い映画でした。家内とは、結婚後もいっしょに楽しめると思ったのですが、「性格の不一致」とでも言うのでしょうか、この16年間、私の誘いにもなしのつぶてです。

それではと、子供達を、もの心がついた頃より、映画につれ出しました。年末の映画館のすいている時に、ゆっくり鑑賞するのが、一年の締めくくりとなっていました。ところが近年、子供達も反抗期のせいでしょうか、別の階の映画館に行きたいと言い出すようになりました。国民的キャラクターも、我家では、全く認知されず、隠れファンとなっているわけです。

私と寅さんの一方的なつき合いは、大学時代、友人に誘われ、場末の映画館で3本立てを見た時に始まります。折しも、世間では70年安保闘争の嵐が吹き荒れ、当時、ノンポリで、のんびりしていた私の心の中にも、権力に反抗する若者の気概を理解できる部分があったのでしょう。寅さんのアウトロー的な生き方は、そうした私の心とマッチしたのかもしれません。

学生時代には、寅さんの自由奔放な旅にあこがれ、日本全国、田舎を選んで一人旅をしました。駅の案内で、安い旅館を捜し、狭い部屋で明日の行き先を決める。風の吹くまま、気の向くままの気楽な旅は、それは楽しいものでした。

寅さんの魅力は、数多くあげられますが、一番は、やはり温かさではないかと思っています。おいちゃん、おばちゃん、さくら、博、満男、など家族に注ぐ温かい愛情を、タコ社長や源公にも、又、旅先で出会った全く見ず知らずの人にも、同じように、惜しげなく振りまくその姿は、時には、自己犠牲的とも思えました。又、見ず知らずの人が、大学の偉い先生であったり、財産家であったりしても、一向に気にしないで、地位や肩書きにとらわれず、人間としてありのままにつき合う、その姿にいつも教えられる思いでした。

開業して5周年を迎え、いろいろな事を考えますが、少なくとも、将来、天国で寅さんに会ったら（もし、私が行けたらの話ですが）「テメエ、さしずめインテリだな」と言われないように、今後も精進を積んで行きたいと思っています。

結婚してみて

松　岡　知　己

結婚して６カ月がたってみて、何か独身時代と変わった点としては、自分で料理する機会が減ったこと、アパートに帰って自分で鍵を開けること、明かりをつけることもなくなり、風呂も沸いていて入るだけでよくなったことも変わった。一番よいのは、優しく迎えてくれる女性が居て楽しい会話ができるのがうれしいです。

出てくる料理の味付けにうるさく言うこともないつもりです。妻は、わたしがおいしいと言わないと安心しないみたいですが、「自慢料理はまだない」と言っているので、紹介するのは今回はなしとしておきます。

それと、他に変わった点は、怒られる様になったことです。何で怒られるかと言うと、急に予定を変えたり、わたしのペースに合わせさせたりすると文句を言われます。わたしが思っていたより芯がしっかりしていて、かなり意見を言われます。説明するだけより意見し合う方がたのしいです。

休日は、二人で熊本の街をぶらぶらしながら買い物したり、映画を観たりしています。宮崎より人が多いのに感動している田舎者の状態です。

これからもいろいろなことがあると思いますが、お互い楽しくやって行こうと思っています。

狭い部屋もいいもんだ

濱　田　浩　朗

今年４月に結婚をさせていただきました。田島教授をはじめその他教室の先生方には、お忙しいところご迷惑をおかけしました。失礼ながらここで御礼申し上げます。

さて、７月より東京で麻酔研修をしておりますが、“夫婦で来られたのは初めてです”と大家さんに言われ、その驚いた様子に一抹の不安を抱きながら上京しました。前任の県病院で徳久先生に“新婚は狭い部屋がいろんな意味でいいものだ”と言われ純情な私は何のことだかよく分かりませんでした。しかしお陰様で早くも妻が懐妊いたしました。今更ながらその言葉の意味をかみしめております。

こうなってしまっては、狭い部屋での楽しみもなくなってしまい、現在勉学にいそしんでいる毎日です。

“狭い部屋もいいもんだ”と口ずさみながらまた次第に冷え込んでゆく東京での生活をどう過ごそうかと考えながら毎日自転車で片道15分かけて通勤しております。

取り急ぎまして現在の心境を筆の向くままご報告申し上げます。

皆様もご自愛下さいますように。

新入賛助会員紹介

心の中にあるもの

川　越　　修

私の長い人生で最も影響の大きかったものは、戦争体験だと思います。昭和16年12月８日開戦し、昭和20年８月15日終戦になりました。小学５年の時開戦し、中学３年の時終戦になりました。日本、ドイツ、イタリア対アメリカ、イギリス、ソ連でした。世界を２分しての第２次世界大戦でした。小学５年でしたが昭和16年の８月頃からは日本が戦争に突入しそうだということが子供の会話の中にもありました。その日全校生徒を集めて校長先生から日本の将来は諸君の双肩にかかっているという話しを聞き身のひきしまる思いでした。開戦から１年半日本は連戦連勝でした。がそのあとは連戦連敗でした。連日のようにグラマン戦闘機が頭上からバラバラと機関銃をうってきました。昨日はあの人、今日はこの人と友だちが殺されていました。宮崎も一面の焼野原でした。あした生きているか５分５分でした。死を実感しての毎日は貴重な体験でした。のちに医師になり骨肉腫の患者を受持ち死とむかいあって毎日を送っている人の気持ちを少しはわかったと思えたからです。日本は連戦連敗でしたが必ず勝つと信じていました。沖縄では自分と同年の多くの友達が国のため命を落としました。食べるものも着るものも極端に不足していました。が周りがすべて同じでしたから苦しいとはあまり思いませんでした。道端の草も食べてしまったと云っても信じてもらえぬと思います。野の草のようなたくましさが少しでもあるとしたら、このような生活の中ではぐくみ育てられたものだと思います。戦争が終わった時生き残ったという実感でした。生き残った者は死んだ者の分まで生きなくてはいけない。行きたくても死んでいった人々の分までどう生きたらよいのか今もそれを考えて生活しています。が既に65歳。色々の意味で無理のきかぬ年になってしまいました。限界を感じながらの毎日です。

昭和30年	熊本大学医学部卒業
昭和31年	インターン終了
昭和31年～昭和34年	県立宮崎病院整形外科
昭和34年～昭和38年	整肢学園
昭和39年～昭和42年	大江整形外科病院
昭和42年～昭和50年	県立宮崎病院整形外科
昭和50年～昭和54年	整肢学園
昭和54年～現在	開業（18年）

色々お世話になります。よろしくお願いします。

還暦に想う

後　藤　一　成

今年1月還暦を迎えました。永く生きたものだと思います。書類の年齢欄に60才と書き入れる時、会社なら定年退職の時期だなと時々過去を振り返る事があります。国民学校3年生で終戦。当時2機の米軍機と我が戦闘機が空戦をしながら学校の上まで来て遂に撃墜されたのを今でもはっきり記憶しています。

それから進駐軍の時代、空腹がつらかった少年時代、代用食として食べ過ぎた芋、豆、カボチャ等は今でも好きになれません。白人を見るとなんとなく緊張するのは、当時ジープに乗って格好よく、何となく彼等に見下されているような気がして、その上、粉ミルク、米軍放出物質によりやっと空腹を癒していたという潜在意識が働いているのではないかと思います。

とにかく混乱の内に少年期を終えて、色々と曲り道をした上に、当時定員40名の山口医大へ入学し36人で卒業。インターン終了後、山大の服部教授の教室へ入局。現在西池町で開業しておられる田代先生が医局長で随分とお世話になりました。服部教授は脊椎外科が専門で他の大学からも多くの見学者が訪問されていました。教授の推薦で整形の大学院に入学し、“ホルモンと脊椎との関係”と云うテーマを戴き、ラッテを使って数年実験をしました。その後、約30年前の徳島県の日整会で発表し〔ホルモンの脊椎に及ぼす影響に関する実験的研究〕と云う題名で論文を提出し学位を戴きました。

過去を振り返りこの時代が一番楽しく充実していたように思います。良き医局時代でした。

昭和47年、義父が病院を新築し、帰宮し、現在に至っています。当時は整形外科医が少なく手術件数もかなりの数でした。割合としては災害外科が多かったのですが、私は好んで頚椎、腰椎の手術を行っていました。当時は麻酔医がいませんので私が挿管して、婦長が管理し、田代先生と2人でほとんどの手術を行っていましたが、手術手技も同じである事からして、大変楽でもたつく事もありませんでした。

整形外科医会が発足した時は会員が7名位だったと記憶しています。現在30名を越えていますが運営も大変だろうと思います。私は今や引退に近い身ですので、客観的に見る事が出来ますが、今からの人、現役の人は仲間の増える楽しみがある反面、又別の不安もあろうかと思います。何故なら人口の増加率より医師の数が多くなるから開業にしても、尚一層の努力が必要になってくるという事です。

以前は、開業医は10年の発展期、10年の安定期、10年の衰退期と云われ都合、開業して30年で終わりといった具合でしたが、今日、周期が早くなっているかもしれません。

最後になりましたが、2年前、心臓病が原因で血栓による急性大動脈閉塞で右下肢壊死の為、第二外科、整形の両病棟に約3ヶ月入院しました。

二外科では1年前急逝されました古賀教授に心臓の管理、血栓除去で命を助けていただき、田島教授のお陰で右下肢を助けていただきました。

現在ほぼ普通に診療が出来るように回復しましたのも教授、医局の先生方のお陰と深く感謝しております。

妻と一男一女の家族ですが、長男は現在山口大学の整形外科でお世話になり、長女も良縁に恵まれ落ち着いております。

最近ではカートを使用してのゴルフも100を切るようになり、海外旅行もどうにかこなせる様になりました。

今後は、皆に迷惑をかけない様、所謂枯れた（？）人生を送り、欲を言えば年金とやらを一度は戴いてあの世に行けたらと思う今日今頃です。

〈自己紹介〉

前　原　東　洋

当年とって54才。愛妻１人、一男二女あり。

開業してから15年。田舎の開業医は日々の診療に忙しく、さして日常性にも変化なく、いつも週末を待つばかりです。

そして、それを月につなぎ、年を連ねて何をしたのか15年。いつの間にか老眼になり、白髪となりました。

これといって夢中になれる趣味もなく、（これはやはり少し不幸なことです）ゴルフを楽しみに仕事をしていますが、全然上手くなりません。才能のないことには努力しないことにしました。

しかし、やはり人生には無駄や遊びも必要だとつくづく思うことです。建て前より本音が主義ですが、本音は人を傷つけることも多いようです。

ただ、人は生き様を大事にしなければといつも考えています。

最近、老健施設なるものをしようと思い立ち、今年10月に着工しました。これからの整形外科医は何をすべきか等、相もかわらず青いことを考えています。皆さんよろしくご指導の程お願い致します。

医療法人東陽会整形外科前原病院
〒886　小林市大字細野2033
ＴＥＬ（0984）23－1711
ＦＡＸ（0984）23－9992
〈現住所〉
〒886　小林市大字細野2336－22
ＴＥＬ（0984）24－0134

施設紹介

医療法人社団雄和会　八田病院

八　田　純　雄

昭和58年に父の跡を受け新規開業しました。

現在入院ベット数は49床ですが、そのほとんどの患者さんは慢性老人性疾患の方々です。

外来は整形外科と内科を標榜しています。整形外科については通常の整形外科的治療の外、漢方、針治療を日常的に行っております。針の種類は、体針・頭針（日南の山元先生の開発した山元式頭針）・耳針・手針・音針・皮内針・電気針・フランケ針・表電療法・ダイオード療法・磁気治療・奇経療法などを試みております。

特に急性頚部痛に対しては注射と共に耳針、肋間神経痛にはブロック療法と共に手針、急性腰痛にはフランケ針療法などは特に著効があり、大変重宝しております。

内科疾患の患者さんも１割ほどいらっしゃいますが、そのほとんどが風邪・高血圧・肝疾患などの方々です。肝疾患については第二内科の坪内教授が大学の同級生ということもあり、治療をお願いすることがあります。最近でもＣ型肝炎の完治例や末期の肝硬変による静脈瘤の内科的処置により命びろいした患者さんの例があり、坪内教授には大変感謝しております。

当院にも田島教授の御配慮により大学の若い先生方に診療をお願いしておりますが、整形外科的疾患の外に内科疾患もあるので大変迷惑をかけていると思いますが、今後共よろしくお願い致します。

県立日南病院整形外科

長　鶴　義　隆
柳　園　賜一郎
坂　本　康　典
飯　干　　明

これまでの医局の御尽力により、6月から飯干先生を迎えることができ、4人体制となりました。

仕事の内容として、火、金曜日は主に股関節手術、月、木曜日は主に外傷その他の手術日となっています。それに加えて、難治性の小児股関節疾患（脳性麻痺、先天性多発性関節拘縮症、骨系統疾患に伴う内反股、化膿性股関節炎後病的脱臼等）も扱っております。

月曜日の早朝はカンファレンス、水曜日の午後は総回診を行い詳細かつ適切な治療方針の決定をしています。

股関節患者は病棟の約3分の2を占めており、500症例、600股関節を突破した寛骨臼球状骨切り術の他に大腿骨骨切り術および臼蓋形成術等を駆使して関節温存手術に努めています。

一般外来は毎日午前中2診制をとっており、なかでも小生の股関節外来は毎週水曜日、金曜日の11時までとなっております。

平成10年には新病院も完成予定で、それに向けて最新、最前の医療を目指そうと日夜励んでおります。

国立療養所宮崎病院から

桑原　茂

私（桑原）が当院に赴任して約10か月になります。5年ぶりの関連病院勤務ということで最初は戸惑いもありましたが、3月ごろから調子が出始めました。すでに赴任していました山口先生がよく仕事をこなしてくれ、徐々に軌道に乗ってきています。また、どういう風の吹き回しか9月にはレジデント枠を取ることができ、金井先生が鹿児島から来てくれまして楽な仕事がより楽になって楽しみ暮らしております。10月にはこれも幸運に恵まれて金井先生が正規職員に採用され、後顧の憂いが無い体制になっています。

本院は宮崎市と延岡市の中間に位置し、人口が少なく患者数も余り多いとは言えませんが、まあまあの数は外来、入院とも確保している状態です。近隣に同門で開業されている山口一郎先生がおられ、入院患者を相当数送ってくれるのも大いに助かっております。

近況は以上のようなものですが、現在は私が人寄せパンダ、病棟と手術は金井、山口両君の担当と住み分けもできまして、私自身でやらせてもらえる手術はRA関係だけで、外傷はもとより脊椎の手術やOAに対する人工関節手術も両君で楽しそうにこなしています。

一方、学会活動や研究面では残念ながら0発進ということで、当分は症例報告程度になりそうです。平成9年分までの学会発表は演題名は決まっているものの縮小してまとめざるを得ないようです。3月から使用できるようになった我々のデザインした人工膝関節機械のデータが出るようになると少しは展望が開けるようになるかなと思っていますが、とりあえずは限られた環境でできる仕事をやるしか無いと思っています。大学医局をはじめ関連病院の先生方には今後も何かとお世話になるかと思いますが、ご協力のほどお願い致します。

国立都城病院

税　所　幸一郎

国立都城病院は人口13万人の宮崎県第２の都市：都城市の東方に位置し、都城駅より徒歩15分、バスで５分のところにあります。宮崎医科大学からは車で約50分の距離です。

当院は明治42年11月に都城衛戍病院として創設され、戦後の昭和20年12月に国立都城病院として発足しています。当院の医療圏は宮崎県西部（都城市、北諸県郡、小林市・西諸県郡）と鹿児島県大隅地方におよび、その医療圏人口は約28万人で、地域の中核・総合病院としての機能を担っています。

当院には11の診療科があり、院長を除く医師数は29名（内レジデント５名）です。内訳は内科：６名、外科：４名、産婦人科：４名、小児科：３名、整形外科：３名、泌尿器科：２名、放射線科：２名、耳鼻科：２名、眼科：１名、歯科・口腔外科：１名、麻酔科：１名です。そのほか理学療法士２名がおり理学療法を行っています。また脳外科、皮膚科も標榜していますが、現在は休診中です。一方今回の医療法の改正で認められた口腔外科、リウマチ科が近々標榜予定です。

宮崎医科大学整形外科の関連病院としては昭和60年にレジデント１名が派遣されたのが最初で、その翌年からは医長、医師の２名体制でやっていましたが、平成７年７月からはレジデントの枠が１名増え、現在は税所、谷口、吉松の３名で整形外科の診療に携わっています。病床は元々６病棟のみの25床でしたが、平成７年に医師数が３名になるとともに整形外科の病床も10床増え全体で35床となり、現在６病棟に30床、３病棟に５床あります。外来は毎日午前中行っていますが、患者数が１日平均60～70名、多い日には約100名のこともあり、２名で対処しています。疾患としては骨粗鬆症、変形性脊椎症、膝関節症、骨髄炎など慢性疾患や腱鞘炎、骨折や脱臼などの外傷、スポーツ傷害などが多いです。そのほか当科では特殊外来としてリウマチ外来を火曜日と金曜日に設け、リウマチ患者の診療にも積極的に取り組んでいます。また木曜日の午後は装具外来とし、義肢、装具の採型、チェックを行っています。手術日は原則として月・水・金曜日の午後となっていますが、最近は予備日の木曜日の午後も利用している現状です。手術件数は年間約180例です。外傷が主で、骨折に対して骨折合術や人工骨頭置換術を、膝のスポーツ傷害に対しては関節鏡検査、半月板切除術、靭帯再建術などを行っています。そのほかにリウマチや変形性関節症に対して人工関節置換術滑膜切除術などを行っています。

三股町国民健康保険病院

田　代　宏　一

宮崎東病院での○○構想は微風だにせず、空しく日々が過ぎていきました。平成６年10月より三股町立病院に着任して約２年、遅ばせながら町立病院と三股町についてご紹介致します。

三股町は都城市の東側に隣接し、東西に長い地区であり、西地区はかなり都城市にくい込んだ状態で、都城のBed townとして人口増加も著しく、町レベルでは佐土原、清武に次ぎ現在２万３千人と年々増えている様です。又産業経営大学もその西地区にあり、若者あふれる活気ある町並みという感があります。東地区は豊かな自然に恵まれ、沖水川という清流沿いに農村が築かれており、都城盆地に広がる扇状地といった所でしょうか。昔より肥沃な土地柄だったらしく、町内から種々の土器が発掘されており、又城跡も数カ所に存在し、かつては島津と伊東との攻防が繰り広げられ、藩境・交通の重要地点であった事が想像されますが、現在では風光明媚で、のどかな町という風情です。

さて三股町立病院はというと、三股町のほぼ中心にあるのですが、都城市からみると東端というイメージがあります。私も赴任するまでは名前は知っていても所在地は知りませんでした。都城国立に２年間勤務していた時も、近くを通っていたのですが、その存在には気づいていませんでした。病院本体はＳ29年に築かれ、２階立ての鉄筋で、何回かの補修・改築が補され、外観は仲々清楚です。１階に外来、レントゲン室、ＣＴ室、検査室、リハ室等があり、２階が病棟です。病床はかつては100床程あった時期もある様ですが、結核病棟の廃止等もあり、現在は一般病棟として40床となっています。内科３名、整形１名、非常勤の皮膚科で診療を行っており、一般診療のみならず、訪問診療・看護、住民健診、健康教室等に従事し、地域医療に従事しているという実感がわく内容です。整形外科開設時は、町予算より、整形外科診療に必要な診療器具、手術器材等備えていただき、診療に支障を感じることなく専念できていることは感謝に耐えないところであります。又、病院敷地内には、デイサービスセンター、健康管理センター、介護支援センターが併設されており、老人介護の中心的存在になるべく、徐々に包括医療に向け取り込んでいる姿勢がみられる風情となっています。

日常の診療は中高年が主体で、変形性脊椎症、膝関節症、肩関節周囲炎が多く、やや退屈気味ではありますが、一工夫加えながら気分をまぎらわしております。宮崎市から三股町までは、車で一時間弱程の道のりです。近くに来られたときは病院にお立ち寄り下さい。

宮崎市郡医師会病院

黒田　宏

宮崎市郡医師会病院は昭和59年4月1日に許可病床150床で新別府町の現在地に開設され、同年8月には許可病床206床となりました。開設時の診療科は、内科・外科・整形外科・産婦人科・放射線科・麻酔科の6科で、宮崎市郡の救急医療の一端を担ってきました。平成8年4月には胸部外科病棟が増築され、それに伴いICU、CCUがそれぞれ6床増床されました。現在、病床数は218床（ICU14床、CCU10床、2病棟個室9床、3病棟77床、周産期センター16床、4病棟92床）で、診療科は前途の6科に新たに心臓血管外科を加え、7科を標榜し、常勤医は25名となっています。

今後さらに健康増進から疾病の予防、治療及びリハビリや在宅ケアに至る包括的、合理的な保健医療体制の確率を図るために、地域保健医療の中核となる宮崎市郡地域保健医療センター（仮称）の建設を計画し、すでに一部実行に移っております。具体的には(1)医師会リハビリテーション病院（早期の社会復帰を目指した急性期リハビリテーション）(2)老人訪問看護ステーション（在宅医療支援としての訪問看護ステーションの中枢）(3)救急医療専用研修施設（救急医療水準の向上を目的とした消防救急隊員実施修練研修施設）(4)市伝染病舎（伝染病予防法に基づく隔離収容施設）(5)市保健センター（地域保健活動の拠点として）などです。これらの施設を宮崎市として一体的推進を図るという構想であり、上記の施設設立のため周囲の田畑約5000坪を宮崎市が買収し、現在整地を行っているところです。

整形外科は開院当時は大江幸政先生（現大江整形外科病院・副院長）が一人で勤務され、昭和62年7月1日から当教室の関連病院となり、同時に医師枠が2名に増員されました。平成3年12月1日より更に3名に増員され、現在黒田・本部・福元の3名で診療にあたっています。症例は全て会員の先生方からの紹介と急病センターからの患者であり、特に高齢者の大腿骨頚部骨折が多く紹介されます。（ちなみに私が赴任してからの手術症例のうち大腿骨頚部骨折は全体の38％を占め、また70歳以上の高齢者は全体の43％を占めております。）

今後も会員の皆様に迷惑をかけないように精進・努力していきたいと考えております。今後とも宜しくお願い申しあげます。

済生会日向病院

川　添　浩　史

私が現在お世話になっている済生会日向病院は、病床数200で日向市および周辺町村の中核的病院として位置付けられています。診療科は従来から、外科、消化器科、内科、整形外科、耳鼻科、小児科、放射線科と非常勤で眼科、皮膚科があり、今年４月から脳外科が常勤で入りました。この10月からは手術室、救急外来の増築工事が始まり、麻酔科の常勤も入ることになり益々充実しつつあります。

整形外科は部長の酒井先生と私の２人体制ですが、外来は午前中だけで80～100人、入院は30数人、手術も年間150件ぐらいあり、かなり精力的に活動しています。

世の中高齢化社会になりつつある中、ここも例外では無く、じいちゃん、ばあちゃんが多く訪れます。なかでも大腿骨頚部骨折の年齢は高く、70歳台より80歳台のほうが多いぐらいで、70歳台前半のかたが頚部骨折で入院となると、スタッフ一同“めちゃめちゃ若いね”と声が揃います。そんなじいちゃん、ばあちゃんに囲まれ、良くはたらく看護婦さんと楽しく仕事をさせていただいてます。

“１年ね”といわれて日向に赴任してはや１年３ヶ月。結構住みごこちがいいです。まわりには自然が一杯で、山も川も海も揃っています。魚は安くて美味しいし、そろそろ鮎の季節ですね。夏は潮干狩りもできるし、磯に行けばさけのつまみにぴったりの貝もいくらでも拾えます。かと言ってとんでもない田舎でもなく、大きなスーパーも有りますし、適度に街で、生活しやすい環境です。色白だったうちの子供も日向の生活ですっかりどす黒くなってしまいました。宮崎からだと交通の便がちょっと悪いため、なかなか県北にまで足を延ばされることも少ないかもしれませんが、住んで見れば本当にいいとこです。

最後にもう一つ。日向病院には独身の看護婦さんが一杯いますが、いいかたが多いのです。独身のうちに日向に来なかったことに、多少の後悔の念を禁じ得ません。みんな結婚する気満々なのですがなぜか独身です。出会いをお求めの方がいらっしゃいましたら、是非ご連絡ください。（別に看護婦さんに脅され、はがい締めにされながらこの文章を書いたわけではありませんので、念のために。）

新入医局員自己紹介（順不同）

氏　　名　吉田尚紀
生年月日　昭和42年4月4日生
出身高校　都城泉ヶ丘高等学校
出身大学　福井医科大学
血液型　A　型

今春、晴れて国家試験に合格し、宮崎医科大学整形外科に入局させて頂きました。福井に残るか、地元に帰るか随分と悩みましたが、宮崎の青い空と青い海に引き寄せられて帰って来ました。入局して半年近くになりましたが、入局して良かった事は、退院してゆく患者の笑顔を見れたことです。まだまだ半人前で、失敗も繰り返す私にでさえ、感謝の言葉をかけてくれるので、とてもうれしく思っています。

今後も早く半人前から脱出して一人前の整形外科医になれるよう努力していきたいと思います。

氏　　名　栗原典近
生年月日　昭和46年6月14日生
出身高校　宮崎県立宮崎西高等学校
出身大学　宮崎医科大学
血液型　B　型

今年、宮崎医科大学を卒業し、宮医大の整形外科に入局して、5ヶ月を過ぎました。あっという間に過ぎてしまったという印象が強く、それに比べて、自分の知識のなさばかり思い知らされる毎日です。医局の諸先生方には御迷惑ばかりかけております。一日も早く、同門会の先輩方の様に一人前の整形外科医となるべく、努力していきたいと考えております。未熟者ですが、今後の御指導をよろしくお願いします。

氏　　名　石　田　康　行
生年月日　昭和45年4月4日生
出身高校　長崎西
出身大学　宮崎医科大学
血 液 型　A　型

7年前に長崎から宮崎医大に入学し、本年6月当科に入局させていただきました。長崎に帰るか、宮崎に残るか、中央に出るか悩みに悩みぬいて当科へきめました。

小学校から大学まで野球部で体育会系で育ってきました。

入局して4カ月がたち、仕事の厳しさ、自分の無力さ、ふがいなさを痛感しています。病棟の仕事にも少しはなれ今やっと片眼があいた気がします。整形外科は範囲が広く、奥も深くわからないことでいっぱいです。早く両眼をあけて同門会の先生方とdiscussionできればと思っています。

自分が選んだ道に納得できるようがんばっていきます。

今後とも御指導の程よろしくお願いいたします。

黒くて、でかい、体重とウエストが100の石田と覚えていただければ幸いです。

氏　　名　野　中　隆　史
生年月日　昭和40年8月9日生
出身高校　宮崎県立宮崎南高等学校
出身大学　宮崎医科大学
血 液 型　O　型

宮崎医科大学を卒業し今年宮医大整形外科に入局しました野中隆史です。5月に入局しちょうど5ヶ月が過ぎ、ようやく医局のシステム（野球や学会等）、病院のシステム、病棟の看護婦さん達ともなれてきたところです。

私は学生時代からスポーツが好きでスポーツ医学に興味を持ちこの整形外科に入局しましたが、現在上肢グループをまわっていて、手の機能、疾患、治療にも大変興味深いものがあり、改めて整形外科領域の幅の広さ奥の深さを実感させられているところです。

現在、野球でも勉強でも後ろから付いていくのがやっとですが、気力体力が続くかぎりがんばって付いていきたいと思いますのでこれからも御指導よろしくお願いいたします。

氏　　名　川　野　彰　裕
生年月日　昭和46年8月11日生
出身高校　宮崎県立宮崎西高等高校
出身大学　宮崎医科大学
血 液 型　B　型

同門会諸先生方御侍史

謹啓　平素は研修医の指導について種々の御配慮頂きましてありがとうございます。

さて、下記の研修医を御紹介申し上げます。

＃1．慢性スポーツ症

＃2．慢性西橘通り出没症の急性転化

いつも大変お世話になっております。25才男性です。

＃1についてですが、中学・高校を6年間陸上競技、大学6年間ボート競技にうちこんでおり、日頃より全身の痛みを訴えております。現在、野球により、保存的に経過観察中です。

＃2につきまして、大学時代より時々、繁華街であります西橘通りに出没しておりました。しかし、H8年の5月頃より仕事のストレスのせいか、出没回数の増加傾向がみられます。

＃1，2について、H8年5月より当科において入局加療中であります。つきましては、今後の御高診、御教授の程、よろしくおねがいします。

氏　　名　森　　治　樹
生年月日　昭和45年7月6日生
出身高校　宮崎県立宮崎西高等学校
出身大学　宮崎医科大学
血 液 型　O　型

今年入局しました森治樹と言います。

宮崎西、宮医大卒です。大学時代はサッカー部に所属していました。

入局して現在約5ヶ月、脊椎班で頑張っています。周りの諸先生方々や看護婦さん、事務の方々みんなやさしい人たちばかりで、毎日が充実しています。

今後、どこかの病院で、一緒に仕事をする事があると思いますので、その折には、宜しく御指導下さい。

氏　　名　前　田　和　徳
生年月日　昭和44年6月5日生
出身高校　宮崎県立宮崎西高等学校
出身大学　福岡大学
血 液 型　A　型

今年福岡大学を卒業し、入局させていただきました。

高校時代はハンドボール、大学時代はラグビー部に所属していました。入局してから早くも半年過ぎようとしていますが、いまだ諸先生方に多大な迷惑をかけ、勉強不足な自分を痛感しておりますが、諸先生方や、看護婦さん達にいろいろと助けてもらい非常に充実し、楽しく働かせてもらっています。又、入局してから始めた野球も少しずつですが上達の兆しも見え、西日本野球大会では2軍で2連覇することができ、非常にいい経験ができてよかったです。

今やっと軌道にのりかけたばかりの研修医生活ですが、一生懸命がんばって、いつの日か、同門の先生方に負けぬ整形外科医になるよう、猛進する気持ちでおりますので、同門会の先生方、今後とも御指導のほど宜しくお願い申し上げます。

氏　　名　有　住　裕　一
生年月日　昭和43年7月15日生
出身高校　宮崎県立宮崎大宮高等学校
出身大学　宮崎医科大学
血 液 型　O　型

入局して約5カ月、ようやく仕事の仕方を把握してきた今日この頃です（もっとも、研修医の一番の仕事は野球の練習に参加することだとも言われていますが・・・）。学生時代のイメージと異なった整形外科学の奥の深さを改めて認識させられています。

また、入局以来の最大の（？）イベントであった野球大会も1軍・2軍とも優勝でき、初めて医局のために貢献できたような気がしました。来年の札幌での大会が今からとても楽しみです。

勿論、仕事においても、これから少しでも諸先生方に近付けるように頑張っていきたいと思っています。

今後とも宜しくお願い致します。

氏　　名　河　原　勝　博
生年月日　昭和46年8月11日生
出身高校　兵庫県立尼崎稲園高等学校
出身大学　宮崎医科大学
血 液 型　O　型

今年、宮崎医科大学を卒業し、この名誉ある宮崎医科大学整形外科に入局させていただきました。

学生時代はソフトテニス、バイト、勉学（？）に明け暮れる毎日を送っておりました。

現在、入局して5ヶ月、病棟の仕事も慣れ看護婦さんに怒られることも半減（？）して来たところです。そして、下肢グループに所属し、先輩方の御指導のもと、病棟、外来、野球、研究と忙しく、充実した研修医生活を送っております。

私は高校時代より、自らのスポーツによる障害に悩みながら、テニスをプレーしておりまして、医師になれば、障害を持ちかつ夢持つプレーヤの手助けがしたいと思い、スポーツドクターを目指すべく整形外科医となりました。

まだ未熟な私ですが、しっかりと研鑽を積み、一人前の整形外科医になりますので、宜しくお願い致します。

教室同門の研究業績

（1995. 1月～12月まで）

◆著　　書

1　肩こり症（胸郭出口症候群を含む）

田島　直也

今日の治療指針1995年版　37巻　591−592，医学書院，1995，東京

2　腰背部のスポーツ障害・外傷（分担執筆）

田島　直也

今日の整形外科治療指針　第3版　265−267，医学書院，1995，東京

3　膝，下腿，足部の外傷（分担執筆）

田島　直也　　桑原　　茂

新版　整形外科学・外傷学　529−542，文光堂，1995，東京

4　腰椎変形性脊椎症（分担執筆）

田島　直也

今日の治療指針1996年版　38巻　608，医学書院，1995，東京

◆原　　著

1　特集『関節症・関節炎とスポーツ』変形性膝関節症とスポーツ

田島　直也　　桑原　　茂

臨床スポーツ医学，Vol. 12　No. 2　145−148，1995.

2　特集『整形外科領域におけるブロック療法』ブロック薬剤とその選択

田島　直也　　黒木　俊政

骨・関節・靭帯，8巻　1号　59−66，1995.

3　腰痛の予防と治療

田島　直也

教育と医学　4，63（341)−67（345)，1995.

4　腰痛性疾患－その診断と治療－腰痛をきたすいろいろな疾患

田島　直也　　久保紳一郎

リウマチ科，Vol. 13　No. 4　267−272，1995.

5　当科におけるＭＲＳＡ院内感染症例の検討

黒木　浩史　　田島　直也　　平川　俊一　　久保紳一郎

田辺　龍樹　　松元　征徳　　本部　浩一　　関本　朝久

整形外科と災害外科，44（1）32−35，1995.

6　頚椎疾患におけるＦ－waveの臨床的意義（第一報）

関本　朝久　　田島　直也　　平川　俊一　　松元　征徳

黒木　浩史　　中村　誠司

整形外科と災害外科，44（1）119−123，1995.

7　ＲＡ頚椎後方固定術後成績不良例の検討

黒木　龍二　　桑原　　茂　　福田　健二　　谷口　博信

津曲　孝康　　浪平　辰州　　田島　直也

整形外科と災害外科，44（2）541−544，1995.

8　世界ベテランズ陸上競技大会参加選手の血液性状

樋口　潤一　　田島　直也　　黒木　俊政　　松岡　知己

川添　浩史

整形外科と災害外科，44（2）602−605，1995.

9　ＲＡ頚椎病変の画像診断について－３Ｄ－ＣＴとＭＲＩを中心に－

谷口　博信　　桑原　　茂　　金井　純次　　永井　孝文

田島　直也

日本整形外科学会雑誌，69（2）S120，1995.

10　腰椎疾患における膀胱機能障害の検討

平川　俊一　　田島　直也　　桑原　　茂　　久保紳一郎

田辺　龍樹　　黒木　浩史　　福元　洋一

日本整形外科学会雑誌，69（3）S560，1995.

11　成長期スポーツ傷害とその予防－自験例の統計から－

帖佐　悦男　　桑原　　茂　　黒木　俊政　　樋口　潤一

田島　直也

日本整形外科学会雑誌，69（3）S814，1995.

12　50歳代以降の股関節症に対する寛骨臼球状骨切り術（ＳＡＯ）の適応と成績

長鶴　義隆　　黒田　　宏　　矢野　浩明　　田島　直也

日本整形外科学会雑誌，69（3）S842，1995.

13　整形外科領域における自己血輸血施行患者に対するエポエチン　ベータ（EPOCH）の臨床評価
—皮下投与による後期第Ⅱ相臨床試験—

前田　平生　　田島　直也　　長鶴　義隆　　他

診療と新薬，32（1）119−135，1995.

14　整形外科領域における自己血輸血施行患者に対するエポエチン　ベータ（EPOCH）の臨床評価
—皮下投与による後期第Ⅲ相臨床試験—

前田　平生　　田島　直也　　長鶴　義隆　　他

診療と新薬，32（1）137−157，1995

15　ＲＡ脊椎病変における造影ＭＲＩ所見

本部　浩一　　桑原　　茂　　谷口　博信　　平川　俊一

田辺　龍樹　　久保紳一郎　　田島　直也

西日本脊椎研究会誌，Vol.21（1）21−24，1995.

16　腰椎疾患における下肢知覚神経活動電位(SNAP)および複合筋活動電位(CMAP)の術前後の比較検討

黒木　浩史　　田島　直也　　平川　俊一　　久保紳一郎

松元　征徳　　関本　朝久　　本部　浩一

宮崎県医師会雑誌　19，19−21，1995.

17　持久性運動によるLactate Dehydrogenase（LDH）の変化

黒木　俊政　　田島　直也　　樋口　潤一　　濱田　　稔（衛生学）

九州スポーツ医・科学会誌，Vol.7　9−15，1995.

18　世界ベテランズ陸上競技大会の医事活動

樋口　潤一　　田島　直也　　黒木　俊政

九州スポーツ医・科学会誌，Vol.7　47−51，1995.

19　中学・高校生スポーツ選手の腰痛に対する運動療法の効果

黒木　俊政　　田島　直也　　樋口　潤一　　押川紘一郎

理学診療，Vol. 6（1）7−9，1995.

20　Synovectomy of the Advanced Rheumatoid Elbow with Severely Restricted Range of Motion

Koichiro SAISHO　　Shigeru KUWAHARA　　Naoya TAJIMA

Jpn. J. Rheum. Joint Surg（Ootu），XIV（1），3−8，1995.

21　Bone graft for rheumatoid acetabular protrusion in total hip arthroplasty Experience of using fibrin glue

K. Saisho　　K. Kammonen　　A. Repo　　M. Ikavalko

M. Hamalainen

Jpn. J. Rheum. Joint Surg（Ootu），XIV（1），3−8，1995

22　脊椎のスポーツ傷害

田島　直也　　黒木　俊政

骨・関節・靭帯　Vol. 8 (8) 1069−1078, 1995.

23　ＲＡ上位頚椎病変の３Ｄ−ＣＴ所見

永井　孝文　　桑原　　茂　　谷口　博信　　田島　直也

整形外科と災害外科, 44 (3) 872−876, 1995.

24　腰椎疾患における膀胱機能の評価検討

黒木　浩史　　田島　直也　　平川　俊一　　田辺　龍樹

久保紳一郎　　西　　昇平（泌尿器科）　　山口　孝則（同）

長田　幸夫（同）

整形外科と災害外科, 44 (3) 1038−1041, 1995.

25　Screw 型椎体間Inplantの力学的検討と臨床経験—T. F. C. sistemを用いて—

久保紳一郎　　田島　直也　　平川　俊一　　黒木　浩史

整形外科と災害外科, 44 (3)　1061−1065, 1995.

26　滑膜肉腫の治療経験

津曲　孝康　　桑原　　茂　　福田　健二　　柏木　輝行

山本恵太郎　　田島　直也

整形外科と災害外科, 44 (3) 1139−1141, 1995.

27　椅坐位からの立ち上がり動作の分析

川越　正一　　田島　直也　　帖佐　悦男　　柏木　輝行

鳥取部光司

日本整形外科学会雑誌, 69 (8) S1699, 1995.

28　小病院でのスポーツ医学への取りくみ

獅子目賢一郎　　田島　直也　　黒木　俊政　　樋口　潤一

全日本病院協会雑誌, 6 (3) 247−249, 1995.

29　Effect of Hematological changes immediately after Marathon Competition in Middle Aged Athletes

N. Tajima　　T. Kuroki　　J. Higuchi

Jpn. J. of Orthopaedic Sports Medicine, 15 (4) 15 (413)−18 (416), 1995.

30　成長期の野球障害について

田島　直也　　帖佐　悦男

'94　みやざきスポーツ科学委員会研究報告書, vol159　28, 1995.

31　中高年国体選手を対象としたメディカルチェック

黒木　俊政　　樋口　潤一　　田島　直也

'94　みやざきスポーツ科学委員会研究報告書, 1−4, 1995.

32　宮崎県高校女子選手メディカルチェック

黒木　俊政　　樋口　潤一　　田島　直也

'94　みやざきスポーツ科学委員会研究報告書, 5−8, 1995

33　腰椎疾患における膀胱機能の術前後の比較検討

黒木　浩史　　田島　直也　　平川　俊一　　田辺　龍樹

久保紳一郎　　西　　昇平（泌尿器科）　　山口　孝則（同）

長田　幸夫（同）

整形外科と災害外科　45（1）71−75，1995.

34　Wagner法寛骨臼球状骨切り術

長鶴　義隆

整形・災害外科，38（4）361−369，1995.

35　股関節症の発症進展因子に関するX線学的検討

長鶴　義隆　　黒田　　宏　　矢野　浩明

Hip Joint, 21　36−39，1995.

36　Preoperative and Postoperative Assessement of Periacetabular Osteotomy by Anteroposterior and False Profileviews of the Hip Joint

E. Chosa　　K. Klaue　　N. Tajima　　R. Ganz

J. B. J. S. 77−B（Supp Ⅱ）180，1995.

37　骨・軟部腫瘍における特殊検査の意義ー2　巨細胞腫

日野浦雄之　　鍋島　一樹　　黒木　隆男　　宮本　　峻

第21回病理検査研究班研修会テキスト　71−77

38　高校ボクシング選手のメディカルサポートの実際

獅子目賢一郎

別冊　整形外科，No28，95−97，1995.

39　地域活動訪問シリーズー宮崎の潤和グループにおける在宅老人ケアシステム

山口　和正

臨床リハ　4（10）980−985，1995.

40　Comparison between descending segmental evoked spinal cord potentials and conductive evoked spinal cord potentials under acute spinal cord compression.

H. Komori　　K. Shinomiya　　M. Yokoyama　　T. Matsuoka

K. Furuya

Handbook of Spinal Cord Monitoring，419−425，1995.

41　脊髄運動機能モニターに関する実験的検討

横山　正昭

東日本臨床整形外科学会雑誌，7（4）441−449，1995.

◆症例報告

1　強直性脊椎骨増殖症を合併した環椎低形成の1例

久保紳一郎　　田島　直也　　平川　俊一　　黒木　浩史

本部　浩一

脊椎・脊髄ジャーナル，8（10）825−828，1995.

2　硬膜管背側に遊離移動した腰椎椎間板ヘルニアに同一レベルでの脱出ヘルニアを合併した1例

黒木　浩史　　田島　直也　　平川　俊一　　久保紳一郎

田辺　龍樹　　本部　浩一

臨床整形外科，30（10）1195−1199，1995.

3　骨粗鬆症に伴う胸椎圧迫骨折により上円錐症候群を呈した1症例

田代　宏一　　福田　健二　　尾田　朋樹

第7回宮崎県地域医療学会誌，109−112，1995.

◈学 会 発 表

1　運動と筋中酵素

黒木　俊政　　田島　直也　　樋口　潤一　　濱田　　稔

第14回宮崎県スポーツ医学研究会，1995，1，宮崎.

2　膝関節外傷・障害患者の膝伸展　屈曲筋力—Cybex Ⅱを用いての評価—

樋口　潤一　　田島　直也　　黒木　俊政　　中村真由美

第14回宮崎県スポーツ医学研究会，1995，1，宮崎.

3　種子骨の陥入により観血的整復を要した母趾ＩＰ関節脱臼の一例

川添　浩史　　永田　高見　　谷脇　功一　　木屋　博昭

弓削　孝雄　　大江浩一郎　　塩川　　徳　　市原　正彬

第14回宮崎県スポーツ医学研究会，1995，1，宮崎.

4　股関節脱臼を合併したダウン症の2例

坂本　武郎　　柳園賜一郎　　山口　和正

第11回九州小児整形外科集談会，1995，1，福岡.

5　治療に難渋した遺残亜脱臼の1例

黒田　　宏　　長鶴　義隆　　矢野　浩明　　立山　洋司

第11回九州小児整形外科集談会，1995，1，福岡.

6　ＴＨＡ（ＭＸ−1）中期成績の検討

柏木　輝行　　田島　直也　　桑原　　茂　　帖佐　悦男

戸田　　勝　　黒木　龍二

第4回ＭＸ−1研究会，1995，2，宮崎.

7　腰部椎間板ヘルニアにおける経皮的椎間板摘出術と顕微鏡視下椎間板摘出術の比較検討

久保紳一郎　　田島　直也　　平川　俊一　　田辺　龍樹

矢野　浩明　　黒木　浩史

第9回宮崎痛みの研究会，1995，2，宮崎.

8　当科における自己血輸血の検討

作　　良彦　　田島　直也　　桑原　　茂　　帖佐　悦男

柏木　輝行　　園田　典生　　長鶴　義隆

第2回自己血輸血懇話会，1995，3，宮崎.

9　ＡＣＬ損傷術後のリハビリテーション—Cybex Ⅱ測定による—

中村真由美　日高　隆　黒木　俊政　樋口　潤一

田島　直也　平川　俊一

第17回宮崎リハビリテーション研究会，1995，3，宮崎.

10　Upit Principleを考慮した上口唇悪性腫瘍切除後欠損の治療経験

蛯原　啓文　田島　直也　久保紳一郎

寺崎祐太郎（国立都城病院皮膚科）

第38回日本形成外科学会九州支部学術集会，1995，3，博多.

11　Superficial Brachial Artery Flapを用いた腋窩部，肘部欠損の再建

蛯原　啓文　黒木　俊政　久保紳一郎　田島　直也

第38回日本形成外科学会九州支部学術集会，1995，3，博多.

12　第Ⅳ中足骨短縮症に対するcallotasisの経験

寺本憲市郎　中島　英親　平野　哲也　米満　弘之

第38回日本形成外科学会九州支部学術集会，1995，3，博多.

13　成長期スポーツ障害とその予防－自験例の統計から－

帖佐　悦男　田島　直也　桑原　茂　黒木　俊政

樋口　潤一

第68回日本整形外科学会学術集会，1995，4，横浜.

14　ＲＡ頚椎病変の画像診断について—３Ｄ—ＣＴとＭＲＩを中心に—

谷口　博信　桑原　茂　金井　純次　永井　孝文

田島　直也

第68回日本整形外科学会学術集会，1995，4，横浜.

15　腰椎疾患における膀胱機能障害の検討

平川　俊一　田島　直也　桑原　茂　久保紳一郎

田辺　龍樹　黒木　浩史　福元　洋一

第68回日本整形外科学会学術集会，1995，4，横浜.

16　50才代以降の股関節症に対する寛骨臼状骨切り術（ＳＡＯ）の適応と成績

長鶴　義隆　黒田　宏　矢野　浩明　田島　直也

第68回日本整形外科学会学術集会，1995，4，横浜.

17　Segmental Square Instrumentation system（The 3-S Instrument Tajima）in Patients with Spinal Canal Sterosis.

Naoya Tajima

The 5th Sino-Japanese Orthopaedic Symposium,，1995，4，Taipei.

18　Lumbar Spondylolysis of Athletes

Naoya Tajima

日中骨科交流医学会，1995，4，Taiwan.

19　Autotrans fusion in the Field of Orthopaedics —Especially Spinal Surgery—

Naoya Tajima

Annual Meeting the Association of the Spinal Surgery,R. O. C.,

1995, 4, Taipei.

20　ＲＡ例における人工膝関節置換術後のCPMを用いた早期可動域訓練の有用性について

柏木　輝行　　桑原　　茂　　谷口　博信　　田島　直也

第39回日本リウマチ学会総会，1995，５，大阪.

21　成長期における頚椎スポーツ外傷

黒木　俊政　　田島　直也　　樋口　潤一　　作　　良彦

園田　典生

第24回日本脊椎外科学会，1995，６，東京.

22　強直性脊椎疾患に上位頚椎病変を合併した２例

久保紳一郎　　田島　直也　　平川　俊一　　田辺　龍樹

黒木　浩史

第24回日本脊椎外科学会，1995，６，東京.

23　腰椎疾患に対するMR myelographyの有用性について

黒木　浩史　　田島　直也　　平川　俊一　　久保紳一郎

田辺　龍樹　　杜若　陽祐

第24回日本脊椎外科学会，1995，６，東京.

24　3−S Instrumentation（田島式）による脊椎後方固定術の術式　成績と適応について

田島　直也　　久保紳一郎　　田辺　龍樹　　黒木　浩史

平川　俊一　　桑原　　茂

第24回日本脊椎外科学会，1995，６，東京.

25　ＴＨＡ（ＭＸ−１）３年以上経過例の検討

柏木　輝行　　田島　直也　　帖佐　悦男　　作　　良彦

園田　典生　　長鶴　義隆　　戸田　　勝　　黒木　龍二

第89回西日本整形・災害外科学会，1995，６，福岡.

26　高度腰椎すべり症の治療経験

久保紳一郎　　田島　直也　　平川　俊一　　田辺　龍樹

黒木　浩史　　村田　　潔

第89回西日本整形・災害外科学会，1995，６，福岡.

27　腰椎疾患における膀胱機能の術前後の比較検討

黒木　浩史　　田島　直也　　平川　俊一　　田辺　龍樹

久保紳一郎　　西　　昇平　　山口　孝則　　長田　幸夫

第89回西日本整形・災害外科学会，1995，６，福岡.

28　大腿骨頚部外傷骨折に対するエンダー法の検討—膝部痛を中心に—

矢野　浩明　　長鶴　義隆　　黒田　　宏　　田島　直也

第89回西日本整形・災害外科学会，1995，６，福岡.

29　関節炎を呈したアレルギー性亜敗血症の一例

山本惠太郎　田島　直也　桑原　茂　帖佐　悦男
柏木　輝行　岡田　光司
第89回西日本整形・災害外科学会，1995，6，福岡.

30　右手月状骨に発生した骨内ガングリオンの1例

末永　治　戸田　勝　黒木　龍二　渡部　正一
田島　直也　松本　宏一
第89回西日本整形・災害外科学会，1995，6，福岡.

31　膝関節傷害患者の膝伸展・屈曲筋力—Cybex Ⅱを用いた評価—

作　良彦　田島　直也　黒木　俊政　園田　典生
樋口　潤一　中村真由美
第89回西日本整形・災害外科学会，1995，6，福岡.

32　上肢長管骨偽関節に対する創外固定法の治療経験

渡部　正一　戸田　勝　黒木　龍二　末永　治
田島　直也
第89回西日本整形・災害外科学会，1995，6，福岡.

33　橈骨短縮に対する仮骨延長の経験

寺本憲一郎　中島　英親　平野　哲也　武田　浩志
木村　展生　米満　弘之
第89回西日本整形・災害外科学会，1995，6，福岡.

34　剣道選手の膝窩部腫瘍を疑わせた1症例

作　良彦　田島　直也　桑原　茂　黒木　俊政
園田　典生　樋口　潤一
第15回宮崎県スポーツ医学研究会，1995，6，宮崎.

35　十代スポーツ選手の腰痛に対する保存療法

黒木　俊政
第15回宮崎県スポーツ医学研究会，1995，6，宮崎.

36　当科における前十字靭帯再建法

樋口　潤一　田島　直也　黒木　俊政　作　良彦
園田　典生　中村真由美
第15回宮崎県スポーツ医学研究会，1995，6，宮崎.

37　高校女子長距離選手のコンディションチェック—その医学的アプローチ—

獅子目賢一郎
第15回宮崎県スポーツ医学研究会，1995，6，宮崎.

38　ムチランス型ＲＡの脊椎変化

桑原　茂　帖佐　悦男　柏木　輝行　作　良彦
黒沢　治　田爪陽一朗　谷畠　満　濱中　秀昭
田島　直也
第11回宮崎県リウマチ研究会，1995，6，宮崎.

39　若年者の両側突発性大腿骨頭壊死にセメントレス人工骨頭置換術（Impact modulai hip system）を施行した１例

瀧下　純夫　　吉永　一春　　前原　東洋

第11回宮崎県リウマチ研究会，1995，６，宮崎.

40　高度の内反膝変形に伴って急速にProtrusio Acetabuliが進行したＲＡの１例

金井　純次　　森田　信二　　山本惠太郎　　桑原　　茂

第11回宮崎県リウマチ研究会，1995，６，宮崎.

41　当院で行っているWhiteside人工膝関節について

大平　　卓

第11回宮崎県リウマチ研究会，1995，６，宮崎.

42　ＴＨＲ後に心筋障害をきたしたＲＡの１例

山本惠太郎　　森田　信二　　金井　純次

第11回宮崎県リウマチ研究会，1995，６，宮崎.

43　ＡＣＬ損傷術後のリハビリテーション—Cybex Ⅱ測定による—

中村真由美　　日高　　隆　　黒木　俊政　　樋口　潤一

田島　直也　　平川　俊一

第11回宮崎県リウマチ研究会，1995，６，宮崎.

44　前足部急性循環障害に対する経口ＰＧＩ$_2$製剤プロサイリン錠の使用経験

吉田好志郎

第14回プロスタグランジン研究会，1995，６，宮崎.

45　運動負荷による酵素変化

黒木　俊政　　田島　直也　　樋口　潤一　　作　　良彦

園田　典生

第21回日本整形外科スポーツ医学会学術集会，1995，６，千葉.

46　前十字靭帯損傷患者の膝伸展・屈曲筋力

樋口　潤一　　田島　直也　　黒木　俊政　　作　　良彦

園田　典生　　中村真由美

第21回日本整形外科スポーツ医学会学術集会，1995，６，千葉.

47　Preoperative and Postoperative Assesment of Periacetabular Osteotomy by Anteroposterior and False Profile views of the Hip Joint.

E. Chosa　　K. Klaue　　N. Tajima　　R. Ganz

The Second congress of the European federation of national associations of orthopaedics and troumatology，1995，７，Munich.

48　超音波骨密度測定装置の透析患者における使用経験

平部　久彬　　王丸　鴻一　　中山　　健　　寺師　宗和

第30回宮崎整形外科懇話会，1995，７，宮崎.

49　超音波骨密度測定装置の高校生における使用経験

平部　久彬

第30回宮崎整形外科懇話会，1995，７，宮崎.

50　骨腫瘍のMRIによる画像診断と組織診断との比較検討

黒沢　治　桑原　茂　帖佐　悦男　柏木　輝行
作　良彦　園田　典生　田爪陽一朗　谷畠　満
濱中　秀昭　田島　直也

第30回宮崎整形外科懇話会，1995，7，宮崎.

51　軟部悪性腫瘍のMRI像の検討

田爪陽一朗　桑原　茂　帖佐　悦男　柏木　輝行
作　良彦　園田　典生　黒沢　治　谷畠　満
濱中　秀昭　田島　直也

第30回宮崎整形外科懇話会，1995，7，宮崎.

52　術前に触知したガングリオンによる肘部管症候群の一例

飯干　明　税所幸一郎　吉松　成博　蛯原　啓文

第30回宮崎整形外科懇話会，1995，7，宮崎.

53　ＭＰ関節ロッキングの３例

黒木　龍二　戸田　勝　田島　直也

第30回宮崎整形外科懇話会，1995，7，宮崎.

54　Rechlinghausen　病に合併した骨軟化症の一例

黒田　宏　長鶴　義隆　矢野　浩明

第30回宮崎整形外科懇話会，1995，7，宮崎.

55　硬膜管背側に遊離移動した腰椎椎間板ヘルニアに同一レベルでの脱出ヘルニアを合併した１例

黒木　浩史　田島　直也　平川　俊一　久保紳一郎
田辺　龍樹　本部　浩一

第30回宮崎整形外科懇話会，1995，7，宮崎.

56　30年間にわたり排膿を繰り返した難治性右大腿骨慢性骨髄炎の治療

谷畠　満　柏木　輝行　黒木　浩史　帖佐　悦男
桑原　茂　田島　直也　倉内　省三　宝亀　玲一

第30回宮崎整形外科懇話会，1995，7，宮崎.

57　診断及び治療に難渋した肥厚性硬膜炎の一例

安藤　徹　田島　直也　平川　俊一　久保紳一郎
田辺　龍樹　村田　潔　黒木　浩史　福元　洋一
井上　篤　内田秀穂

第30回宮崎整形外科懇話会，1995，7，宮崎.

58　スポーツ障害の予防における運動療法の意義―腰痛―

黒木　俊政　田島　直也　樋口　潤一　中村真由美
押川紘一郎

第20回運動療法研究会，1995，7，東京.

59　超音波骨密度測定装置の透析患者における使用経験

平部　久彬　王丸　鴻一　中山　健　寺師　宗和

宮崎県人工透析研究会，1995，7，宮崎.

60　中学・高校生スポーツ選手の腰痛に対する運動療法—第２報—

黒木　俊政　　田島　直也　　樋口　潤一　　中村真由美

押川紘一郎

第10回日本理学診療医学会，1995，７，佐賀.

61　多発骨折に対する創外固定法

川越　正一　　園田　典生　　渡部　正一　　濱中　秀昭

帖佐　悦男　　田島　直也　　谷口　博信

第６回宮崎救急医学会，1995，８，宮崎.

62　四肢多発骨折の初期治療について

濱中　秀昭　　川越　正一　　園田　典生　　渡部　正一

帖佐　悦男　　田島　直也　　谷口　博信

第６回宮崎救急医学会，1995，８，宮崎.

63　頚部脊髄症に対する術後成績の検討

田辺　龍樹　　田島　直也　　平川　俊一　　久保紳一郎

村田　　潔　　黒木　浩史

第44回西日本脊椎研究会，1995，８，徳島.

64　Value of MR myelography in Lumbar Spinal Disease

H. Kuroki　N. Tajima　S. Hirakawa　S. Kubo

R. Tabe　Y. Kakitubata

The 6th Japanese-Korean Combined Orthopaedic Symposium,

1995，８，Kanazawa.

65　ＲＡ頚椎病変にもとずくＡＤＬ障害

桑原　　茂

第24回リウマチの外科研究会，1995，８，新潟.

66　関節内注入液剤による滑膜・軟骨の変化

税所幸一郎　　桑原　　茂　　帖佐　悦男　　柏木　輝行

園田　典生　　田島　直也

第24回リウマチの外科研究会，1995，８，新潟.

67　ＲＡ患者の骨粗鬆症について

園田　典生　　田島　直也　　桑原　　茂　　帖佐　悦男

柏木　輝行　　税所幸一郎　　谷口　博信

第10回九州リウマチ学会，1995，９，福岡.

68　臼底突出を来したＲＡ股関節に対する人工股関節置換術の成績

桑原　　茂　　田島　直也　　帖佐　悦男　　柏木　輝行

税所幸一郎　　谷口　博信　　園田　典生

第10回九州リウマチ学会，1995，９，福岡.

69　Indication of Lumbo-Iliac Instrumentation for Dysplastic Spondylolisthesis—Case Discussion—

Naoya Tajima

XII International GICD Congress，1995，９，Ashevill.

70　Partial pediculeotomy による顕微鏡視下胸椎椎間板ヘルニア摘出術の試み

久保紳一郎　田島　直也　平川　俊一　田辺　龍樹

黒木　浩史　井上　篤

第２回脊椎・脊髄神経手術手技研究会，1995，10，横浜.

71　Local Habilitation System for the Physically Disabled in Miyazaki

Kazumasa Yamaguchi

5th Conference of the Western Pacific Cerebral Palsy Association,

1995，10，Seoul.

72　椅坐位からの立ち上がり動作の分析

川越　正一　田島　直也　帖佐　悦男　柏木　輝行

鳥取部光司

第10回日本整形外科学会基礎学術集会，1995，10，軽井沢.

73　ＲＡ患者における膝関節の動揺性と装具の適応

中村真由美　日高　隆　田島　直也　桑原　茂

平川　俊一　立川　歳弘

第３回宮崎県リウマチのケアに関する研究会，1995，10，宮崎.

74　ＲＡ患者の頚椎病変とＡＤＬ

桑原　茂　田島　直也　帖佐　悦男　柏木　輝行

税所幸一郎　谷口　博信　長田　浩伸

第３回宮崎県リウマチのケアに関する研究会，1995，10，宮崎.

75　腰椎後側方固定術の有限要素法による応力解析

鳥取部光司　田島　直也　平川　俊一　帖佐　悦男

柏木　輝行

第22回日本臨床バイオメカニクス学会，1995，10，金沢.

76　椅坐位からの立ち上がり動作の分析

川越　正一　田島　直也　平川　俊一　帖佐　悦男

鳥取部光司　柏木　輝行

第22回日本臨床バイオメカニクス学会，1995，10，金沢.

77　ＤＸＡによるＲＡステロイド投与例の骨粗鬆症の検討

園田　典生　田島　直也　桑原　茂　谷口　博信

渡部　正一　後藤　啓輔

第23回日本リウマチ関節外科学会，1995，10，金沢.

78　腰痛の疫学的調査（第一報）

柏木　輝行　田島　直也　帖佐　悦男

第３回日本腰痛研究会，1995，10，北九州.

79　高校女子スポーツ選手の卒業後追跡調査―10才代～40才までの追跡

獅子目賢一郎　田島　直也　黒木　俊政　樋口　潤一

第６回日本臨床スポーツ医学会，1995，10，東京.

80　超音波骨密度測定装置の透析患者における使用経験

平部　久彬　　王丸　鴻一　　中山　　健　　寺師　宗和

第28回九州人工透析研究会総会，1995，10，佐賀.

81　血管壁損傷により引き起こされる血脈血栓症に対するＴＦＰＩの経験（第２報）

寺本憲一郎　　中島　英親　　羽室　　強

第22回日本マイクロサージャリー学会，1995，10，札幌.

82　Training-induced changes in composition of LDH isoenzymes in rat skeletal and cardiac muscles

T. Kuroki　H. Takenaka　M. Hamada　J. Higuchi

S. Kubo　N. Tajima

2nd Combined Meeting of the Orthopaedic Research Societies of U.S.A., Japan, Canada and Europe, 1995, 11, SanDiego.

83　股関節におけるartro MRIについて

柏木　輝行　　帖佐　悦男　　谷畠　　満　　濱中　秀昭

園田　典生　　桑原　　茂　　田島　直也　　長鶴　義隆

第22回日本股関節学会，1995，11，久留米.

84　Periacetabular osteotomyのＸ線学的検討—股関節ＡＰ像とFalse profile像を用いて—

帖佐　悦男　　田島　直也　　柏木　輝行　　桑原　　茂

園田　典生　　谷畠　　満　　R. Ganz　　K. Klaue

長鶴　義隆

第22回日本股関節学会，1995，11，久留米.

85　若・壮年期末期股関節症に対する外反骨切り術の適応と成績

長鶴　義隆　　柳園賜一郎　　矢野　浩明

第22回日本股関節学会，1995，11，久留米.

86　人工股関節感染に対する治療経験—抗生剤含有セメントスペーサー使用—

帖佐　悦男　　田島　直也　　柏木　輝行　　桑原　　茂

園田　典生　　濱中　秀昭　　R. Ganz　　長鶴　義隆

第22回日本股関節学会，1995，11，久留米.

87　中・高度大腿骨頭辷り症の治療—画像診断による術式の選択—

長鶴　義隆　　柳園賜一郎　　矢野　浩明

第６回日本小児整形外科学会，1995，11，岐阜.

88　宮崎県における側彎症検診のシステム—その実際と問題点—

作　　良彦　　田島　直也　　平川　俊一　　久保紳一郎

黒木　浩史　　渡部　正一　　安藤　　徹

第29回日本側彎症学会，1995，11，東京.

89　骨粗鬆症に伴う胸椎圧迫骨折により上円錐症候群を呈した一症例

田代　宏一　　福田　健二　　尾田　朋樹

第７回宮崎県国保地域医療学会，1995，11，宮崎.

90　患肢温存術を施行し経過良好な骨肉腫の２症例

濱中　秀昭　　桑原　　茂　　帖佐　悦男　　柏木　輝行

園田　典生　　田爪陽一朗　　田島　直也

第１回宮崎腫瘍治療研究会，1995，11，宮崎.

91　多剤無効ＲＡ例に対するミゾリビンの使用経験

園田　典生　　田島　直也　　桑原　　茂　　帖佐　悦男

濱中　秀昭

第90回西日本整形・災害外科学会，1995，12，宇部.

92　当院で経験した手のＭＰ関節ロッキングの３例

黒沢　　治　　戸田　　勝　　黒木　龍二　　工藤　勝司

田島　直也

第90回西日本整形・災害外科学会，1995，12，宇部.

93　上腕骨および大腿骨骨幹部に発生したcalcifying enchondramaの２症例

田爪陽一朗　　田島　直也　　中村　誠司　　川越　正一

作　　良彦

第90回西日本整形・災害外科学会，1995，12，宇部.

94　診断および治療に難渋した肥厚性硬膜炎の一例

福元　洋一　　田島　直也　　久保紳一郎　　田辺　龍樹

黒木　浩史

第90回西日本整形・災害外科学会，1995，12，宇部.

95　骨腫瘍のＭＲＩ診断の意義について

濱中　秀昭　　桑原　　茂　　柏木　輝行　　帖佐　悦男

田島　直也

第90回西日本整形・災害外科学会，1995，12，宇部.

96　骨・関節感染症の治療経験（抗生剤含有セメント使用例）

谷畠　　満　　桑原　　茂　　柏木　輝行　　帖佐　悦男

田島　直也

第90回西日本整形・災害外科学会，1995，12，宇部.

97　腰椎手術後の臥床による大腿骨頚部骨塩量の変動―ＤＸＡを用いた検討―

黒木　浩史　　田島　直也　　平川　俊一　　久保紳一郎

井上　　篤

第90回西日本整形・災害外科学会，1995，12，宇部.

98　超音波骨密度測定装置の高校生における使用経験

平部　久彬

第90回西日本整形・災害外科学会，1995，12，宇部.

99　膝前十字靭帯再建術後の筋力評価

中村真由美　　黒木　俊政　　田島　直也　　樋口　潤一

第８回九州スポーツ医・科学会，1995，12，福岡.

100 Multiple Use of GD−DTPA Contrast−Enhanced MRI in Conservative Treatment of Lumbar Disc Herniation.

H. Komori K. Shinomiya A. Okawa O. Nakai
I. Yamaura M. Yokoyama
International Society for the Study of the Lumbar Spine, 1995,
Helsinki, Finland.

101 Lumbar Sagital Instability around Neutral Position in Vivo Dynamic Study Using Videofluoroscopy

A. Okawa K. Shinomiya H. Komori H. Hara
H. Yoshida M. Yokoyama O. Nakai
International Society for the Study of the Lumbar Spine, 1995,
Helsinki, Finland

◆特別講演

1　スポーツ外傷・障害に対する予防と治療

黒木　俊政

西都市新春スポーツ懇談会，1995，1，西都.

2　成長期の野球のスポーツ障害・外傷

黒木　俊政

宮崎県少年野球連盟，1995，1，宮崎.

3　少年期の発育と運動

黒木　俊政

平成6年度宮崎市スポーツ少年団および母集団研修会，1995，2，宮崎.

4　中・高年の整形外科領域におけるスポーツ傷害—その問題点について—

田島　直也

和歌山県整形外科医会第5回学術集会，1995，2，和歌山.

5　整形外科領域におけるスポーツ外傷と障害

田島　直也

スポーツ講演会－えびの市教育委員会，1995，2，えびの.

6　脊椎のスポーツ外傷と障害

田島　直也

第13回東海地区整形外科教育研修会，1995，3，津.

7　高校スポーツ選手のメディカルサポートの問題点

獅子目賢一郎

第12回宮崎県臨床整形外科研修会，1995，5，宮崎.

8　慢性関節リウマチの外科的治療

税所幸一郎

第12回宮崎県臨床整形外科研修会，1995，5，宮崎.

9　中高年に対するスポーツ医の対応

田島　直也

福岡臨床整形外科医会，1995，7，福岡.

10　ランニングの医・科学的考察

田島　直也

山梨県整形外科医会，1995，7，甲府.

11　骨の老化—骨を中心とした運動傷害—

田島　直也

平成7年度公開講座，1995，7，宮崎.

12　中高年とスポーツ

田島　直也

第7回鹿児島スポーツ医学研究会，1995，7，鹿児島.

13　成長期スポーツ障害と対策

田島　直也

第2回西日本整形外科スポーツ医学研究会，1995，8，福岡.

14　スポーツ傷害—特に整形外科領域を中心にして—

田島　直也

西諸医師会・西諸内科医会合同学術講演会，1995，8，小林.

15　骨粗鬆症の予防

帖佐　悦男

宮崎県寝たきり予防教室，1995，10，宮崎.

16　成長期スポーツ障害について

田島　直也

第45回慶大整形外科公開セミナー，1995，11，東京.

17　障害児の療育—医療と教育のかけ橋—

山口　和正

第32回九州地区肢体不自由教育研究大会，1995，11，宮崎.

18　ランニング損傷とその問題点

田島　直也

第4回北海道整形外科スポーツ医学研修会，1995，11，北海道.

19　骨粗鬆症について

田島　直也

宮崎県清武町健康教室講演，1995，11，清武.

20　高齢化とスポーツについて—特に骨・関節に関して—

田島　直也

第3回骨と痛み研究会学術講演会，1995，11，郡山.

過去の同門会誌に未掲載の分です。（文頭の番号はその年度に継続してつけています。）

◆原著及び論文

（1992年分）

44　大腿骨頭被覆面積の計算法（股関節単純正面像およびFaux Profil像を用いて）

帖佐　悦男　　田島　直也　　鳥取部光司　他

日本整形外科学会雑誌，66（8）1583，1992.

（1993年分）

39　自己血輸血とエリスロポチエンについて—投与基準と合併症—

帖佐　悦男　　田島　直也　　荒木　康彦　　長鶴　義隆

自己血輸血，6（1）p 11−13，1993.

40　股関節における臼蓋被覆について—二次元および三次元での比較検討—

帖佐　悦男　　田島　直也　　長鶴　義隆

Hip Joint，19：420−422，1993.

41　The Application of Reflectance to the Circulatory Condition of the Lower Extremifies on the Lumbar Spinal Canal Stenosis

Etsuo Chosa, M. D.,　　Naoya Tajima, M. D.,

SICOT：759，1993.

42　Assesment of Acetabula Coreage of the Femal Head

Etsuo Chosa, M. D.,　　Naoya Tajima, M. D.,

Yoshitaka Nagatsuru, M. D.,

SICOT：791，1993.

43　アキレス腱断裂術後後療法について

帖佐　悦男　　田島　直也　　柏木　輝行　　作　　良彦

日本整形外科スポーツ会誌，13（2）186，1993.

44　電気生理学的所見から見た脊椎と脊髄の関係

四宮　謙一　　持田　　潔　　横山　正昭

脊椎脊髄ジャーナル，6（6），409−413，1993.

※　1994年のNo39を上記に変更

（1994年分）

93　上顎癌術後欠損難治例のCervico－Dorsal Flapによる治療経験

蛯原　啓文　　久保紳一郎　　田島　直也

迫田　隅男（歯科口腔外科）　　柴　　良祐（歯科口腔外科）

第37回日本形成外科学会九州支部学術集会，1994，10，鹿児島.

94　長期透析例における足部Avulsion Injuryの治療経験

蛯原　啓文　　田島　直也

第37回日本形成外科学会九州支部学術集会，1994，10，鹿児島.

編　集　後　記

本号が、１年の締めくくりとして、会員の皆様のお手もとに届く頃は年末の慌ただしさの中であろうと思われます。

４つの特集を組んでみました。野球、学会、開業そして結婚のテーマです。

30名を越える先生方から、御投稿を頂きました。皆様、是非とも診療の合間に御一読ください。

世の中、いつの間にかインターネットなるもので結ばれ、そのうち医学の分野もロボットによる診療で、患者さんと直接対話する事はなくなるかもしれません。何かと不安で味気ない毎日ですが、皆様の文章からは、どっこいまだまだ医者の世界はすてたもんではない！と言う心意気が聞こえてまいります。

医者も積極的に社会でのボランティアに参加して、その存在意義を示す時かもしれません。

会員の皆様の御健康をお祈りいたします。

押川紘一郎

宮崎医大整形外科学教室

同 門 会 誌

発 行 日　平成８年１２月
発 行 者　宮崎医科大学整形外科学教室同門会
編集責任者　押 川 紘一郎
印 刷 者　㈾ 愛 文 社 印 刷 所